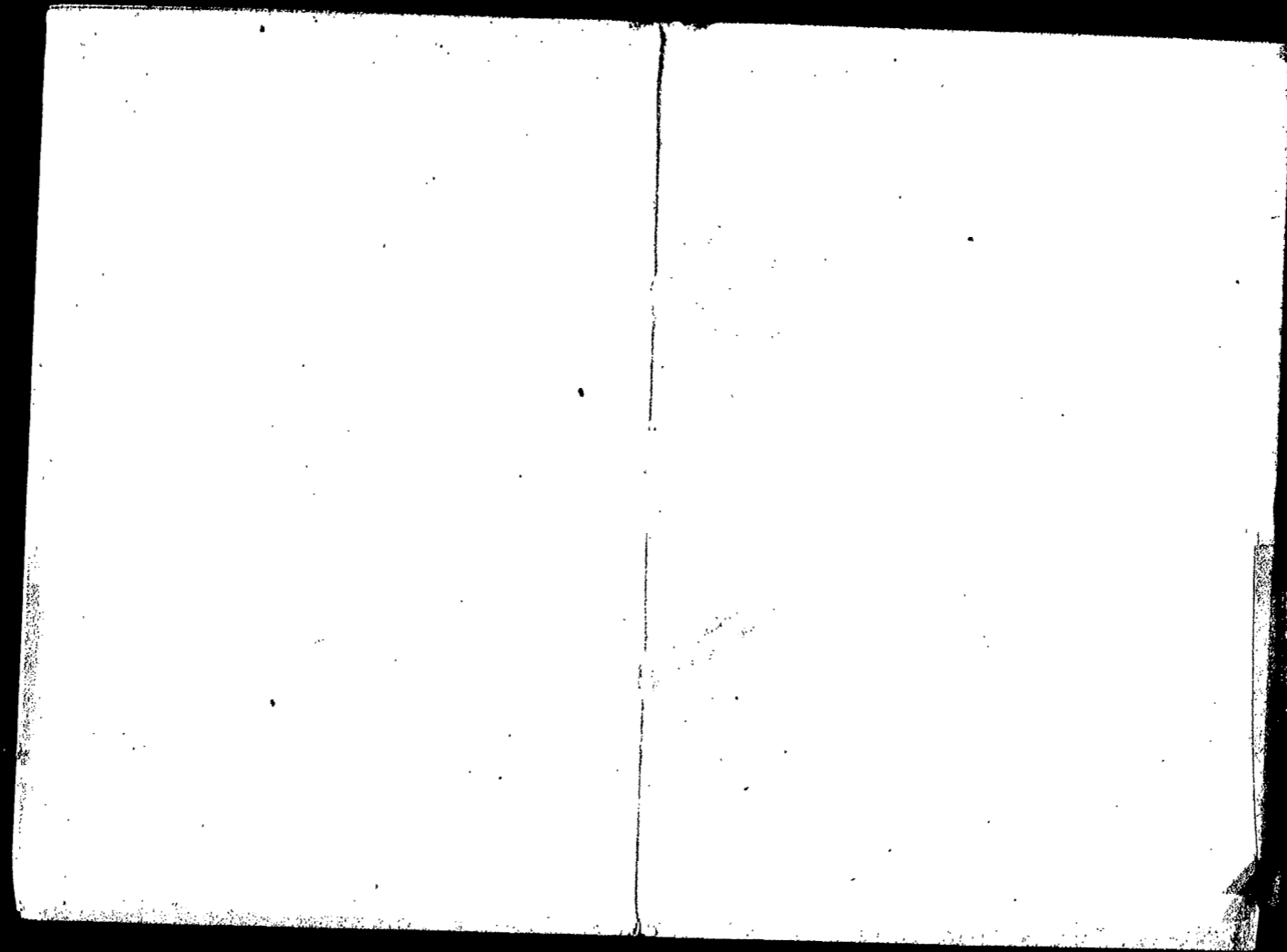


0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 2

臺灣現勢要覽 大正十三年版

原	文	圖	內
卷一四兩	三〇二三	三	和
一四架	三	冊	書

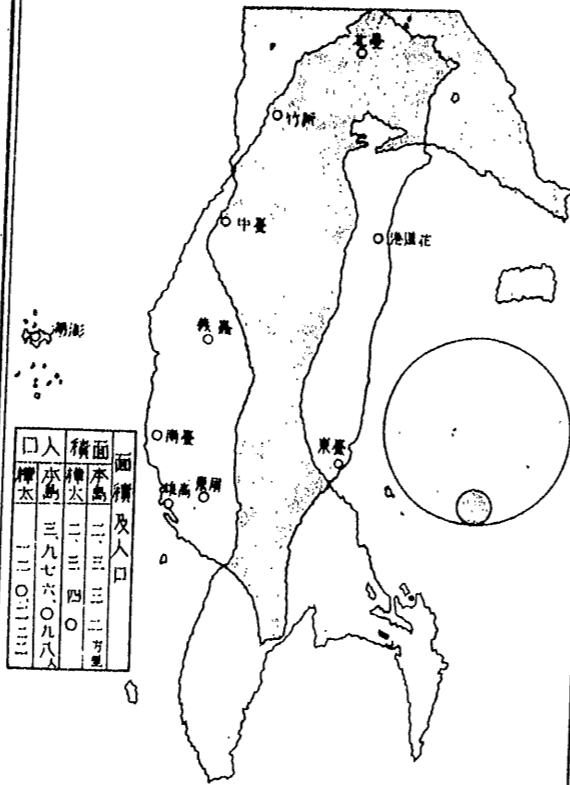
30



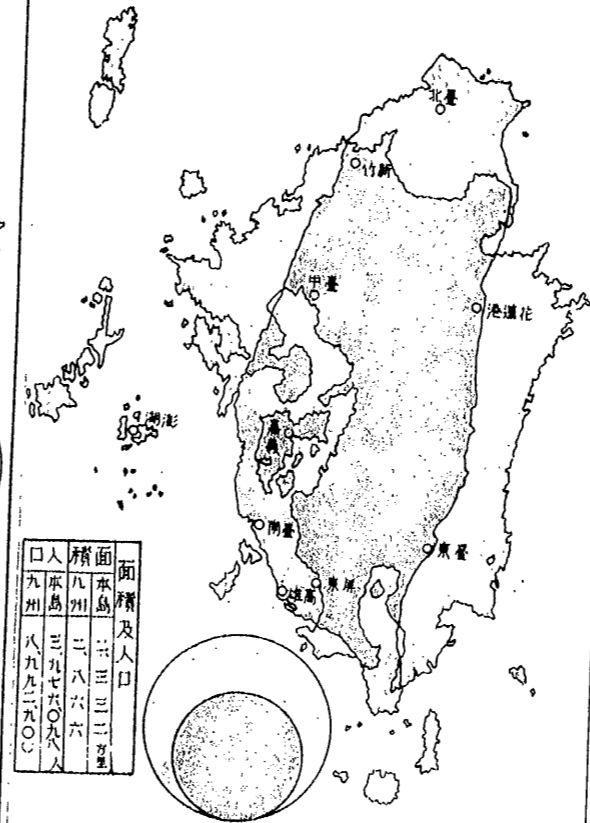
臺灣現勢要覽

352
30233
76

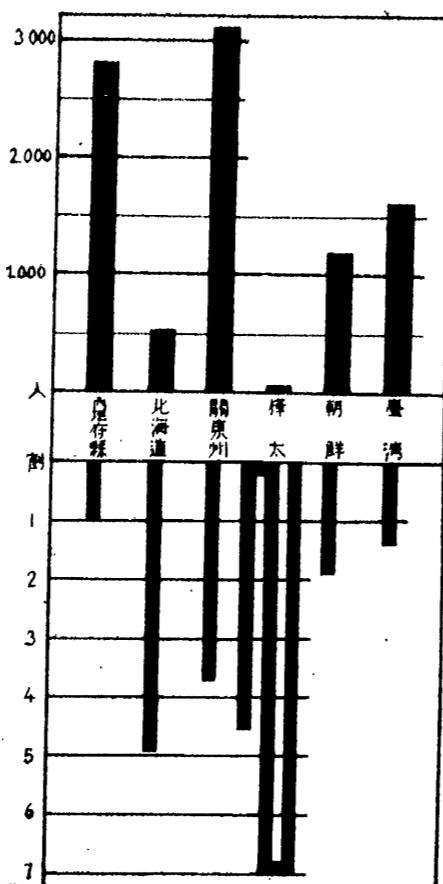
較比口人積面太樺及灣臺



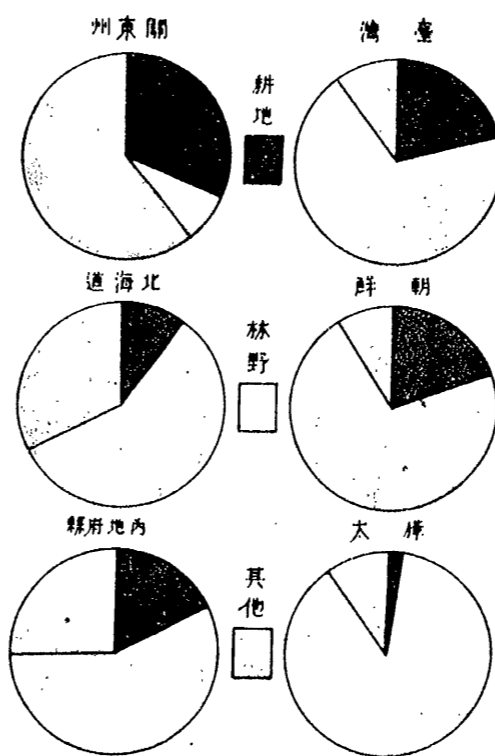
較比口人積面州九及灣臺

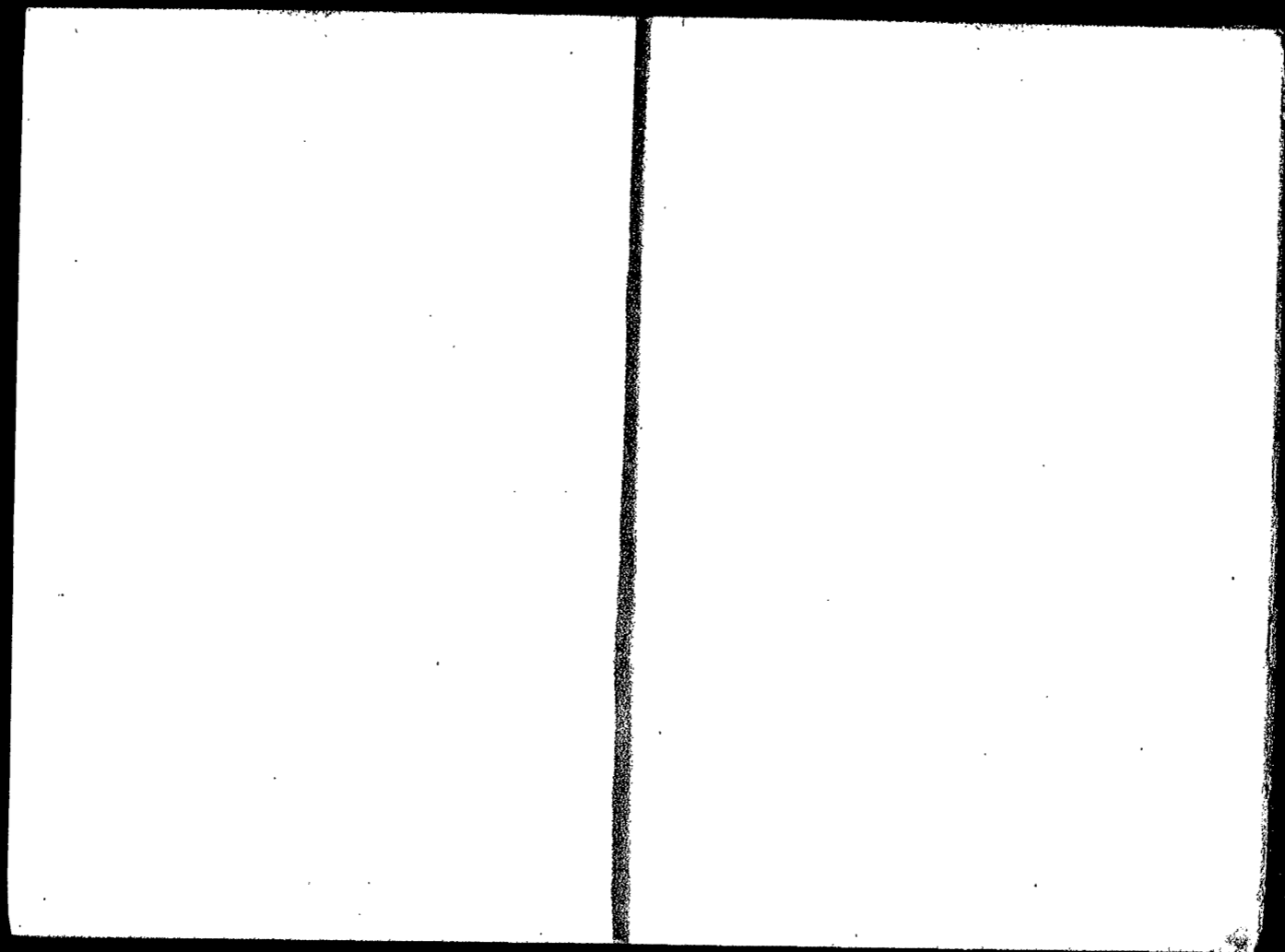


(年一十正大)



土地利用 (例比百分)





凡例

- 一本書は、臺灣の現勢を知るの便に資せんか爲め、主要なる事項に就て、その統計的説明を試みたるものなり。
- 一本書は、大正十一年の事實を基礎としたるも、その最近の統計あるものは、努めて之を採り、又大正十一年の事實不明のもの又は特に必要を認めたるものは、大正十一年以前の統計をも採りたり。
- 一本書は、主として臺灣の現勢を知るを目的とするも、特にその變遷進歩の狀態を説明するの必要ある事項に就ては、累年の統計をも擧げたり。
- 一本書は、帝國に於ける臺灣の地位を説明するの便に供せんか爲め、その必要なる事項に就ては、内地府縣、北海道、朝鮮、樺太、關東州等との比較對照をも試みたり。

大正十三年十月

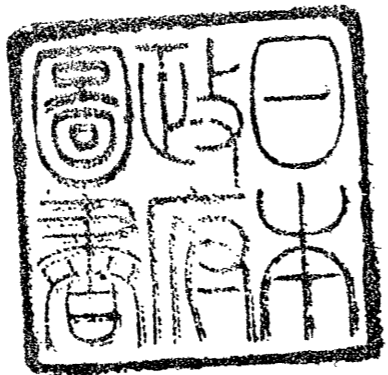
臺灣總督府

臺灣現勢要覽目次

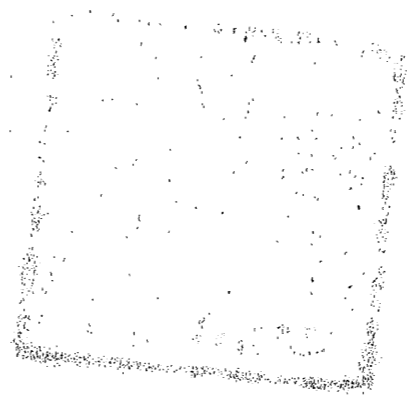
一 位置	一
二 面積	一
三 山嶽	一
四 河川	一
五 土地の利用	一
六 氣温	一
七 雨量	一
八 人口	一
九 本籍別内地人	一
一〇 在外臺灣人	一
一一 在留外國人	一
一二 臺灣語を話す内地人	一
一三 國語を解する本島人	一

一四	婚姻、離婚、出生、死亡	一〇
一五	出生率	一〇
一六	死亡率	一〇
一七	人口の増加	一〇
一八	蕃人	一〇
一九	行政區劃	一〇
二〇	州及廳の面積	一〇
二一	州及廳の人口	一〇
二二	主要都市	一〇
二三	農業戶數	一〇
二四	耕地面積	一〇
二五	水利	一〇
二六	農産	一〇
二七	畜産	一〇
二八	林産	一〇

二九	礦産	一〇
三〇	水産	一〇
三一	工業	一〇
三二	糖業	一〇
三三	貿易	一〇
三四	對手國別外國貿易	一〇
三五	支那香港及南洋貿易	一〇
三六	重要品別外國貿易	一〇
三七	重要品別内地貿易	一〇
三八	雜別貿易	一〇
三九	財政	一〇
四〇	專賣	一〇
四一	銀行	一〇
四二	物價	一〇
四三	教育	一〇



四四 衛生機関	一六九
四五 水道	一七〇
四六 ベストミマラリヤ	一七一
四七 阿片吸食持許者	一七二
四八 鐵道	一七三
四九 郵便電信電話	一七四
五〇 警察官署及職員	一七五
五一 最近十一年間の進歩	一七六
五二 臺灣及九州面積人口比較	一七七
五三 臺灣及樺太面積人口比較	一七八
五四 土地の利用	一七九
五五 人口の減少及人口増加の趨勢	一八〇



臺灣現勢要覽

一 位置

臺灣は帝國の最南端に位し、臺灣本島、澎湖列島及其他の附屬島嶼より成る。今之を經緯度に辨むるに、東經百十九度十八分より百二十二度六分、北緯二十一度四十五分より二十五度三十八分に至る。北は海上六百四十一里にして九州の南端鹿兒島に達し、西は臺灣海峡を隔て、近く支那大陸に相接し、東は太平洋を隔て、遠く米大陸に相對し、南はパツシー海峡を隔て、近く比律賓群島に相隣す。

一 經度及緯度

臺灣本島	極東	臺北州基隆郡棉花嶼東端	三三度
	極西	臺南州北港郡日湖庄新港西端	三〇度
	極南	高雄州恒春郡七星岩南端	三二度
	極北	臺北州基隆郡彭佳嶼北端	三六度

澎湖島

經度(東經) 極東 高雄州澎湖郡查母嶼東端 二九〇
 極西 高雄州澎湖郡花嶼西端 二九二八
 緯度(北緯) 極南 高雄州澎湖郡大嶼南端 三三〇
 極北 高雄州澎湖郡目斗嶼北端 三三六

二 距 離 基隆を基點とする直航距離

那 那 列 島	三三
鹿 兒 島	三三
長 崎	三三
門 司	三三
神 戶(門司經由)	三三
横 濱	三三
釜 山(門司經由)	三三
大 連	三三
福 州	三三

厦 門	三三
汕 頭	三三
上 海	三三
香 港	三三
麻 六 甲(香港經由)	三三
海 峽	三三
西 貢	三三
盤 谷	三三
新 嘉 坡	三三
巴 達 維 亞	三三

臺灣の面積は二千三百三十二方里にして、帝國の總面積四萬四千三百三十八方里
 中その五分三厘を占め、九州よりは稍、小さく、樺太と伯仲し、朝鮮に比すれば
 約その六分の一に當る。尙ほ之を列國の面積に比すれば、瑞西(二、六七八方里)
 と和蘭(二、一四四方里)との中間に位す。

二 面積

總數	面積	百分比
臺灣	2332	100.0
朝鮮	373	16.0
樺太	330	14.1
北海道	285	12.2
内地府縣	2070	89.5

本表の外租借地として關東州の面積二一九方里及委任統治に係る南洋群島の面積一六三方里あり。

臺灣は帝國第一の高山新高山を始め、海拔一萬尺以上のもの四十八座、九千尺級のもの十七座、八千尺級のもの二十四座、七千尺級のもの二十六座を有す。故に七千尺以上の高山の總數は百十五座の多きに達し、所謂「高山國」の名に背かずして熱帯、暖帯、温帯、寒帯等各種の林相を有す。

三山 嶽

臺灣は帝國第一の高山新高山を始め、海拔一萬尺以上のもの四十八座、九千尺級のもの十七座、八千尺級のもの二十四座、七千尺級のもの二十六座を有す。故に七千尺以上の高山の總數は百十五座の多きに達し、所謂「高山國」の名に背かずして熱帯、暖帯、温帯、寒帯等各種の林相を有す。

海面よりの高さ

順位

新高山	三〇四〇	一
次高山	三〇三〇	二
秀姑巒山	三〇二〇	三
スボラス山	三〇一〇	四

南湖大山	三三三	五
富士山(内地)	三三六	六
中央尖山	三三〇	七
關山	三三〇	八
大水窟山	三三〇	九
奇萊山北峰	三〇六	〇
東郡大山	二八六	一
大磐山	二八〇	二
大刺尖山	二七五	三
雲峰	二七六	四
奇萊主山	二六五	五
東嶽大山	二五五	六
合歡山	二五〇	七
北合歡山	二五〇	八
東合歡山	二五〇	九

南王山	二二九	〇
桃山	二二八	一
シシガシ山	二二七	二
華嶽山	二二五	三
丹大山	二二四	四
白姑大山	二二二	五
奇萊主山南峰	二二〇	六
南双頭山	二一〇	七
龍高山南峰	二〇〇	八
卑南主山	一九五	九
千車高山	一九三	〇
カンヌン山	一九二	一
都大山	一九〇	二
外口大山	一九〇	三
卓社大山	一九〇	四

小 關 山	10,130
能 高 山	10,231
屏 風 山	10,237
大 武 山	10,238
尖 山	10,241
バトツノヲ山	10,240
ハイノドノ山	10,240
オヤサノ山	10,240
白 石 山	10,240
ウハノ山	10,240
赤石山(内地)	10,240
東俣山(内地)	10,240
槍ヶ岳(内地)	10,240
安東郡山	10,100
樽 大 山	10,100

登 昇 昇 昇 昇 昇 昇 昇 昇 昇 昇 昇 昇 昇 昇

御 嶽(内地)	10,136
關 門 山	10,067
大石公山	10,080
白根嶽(内地)	10,081
小 雲 山	10,081
大嶽嶽(内地)	10,000

内地の分は第四十一回圖勢一巻に依る。

登 昇 昇 昇 昇

四河川

臺灣は幅員狭く、その最も廣き部分と雖、僅かに四十里内外に過ぎず、且つ高峯南北に貫通するを以て、河川の發源孰れも近く、昔稱の便は多く望むべからず。流域二十里以上のもの僅かに十を算し、最長の河川たる濁水溪にして漸く四十二里に過ぎず。

濁水溪	四十二里
下淡水溪	三十七里
曾文溪	三十七里
淡水河	三十一里
大甲溪	三十一里
烏甲溪	二十六里
八獎溪	二十六里
秀姑巒溪	三十三里
卑南溪	三十三里
大安溪	三十三里

本表は流域二十里以上のもののみを掲ぐ。

臺灣の總面積は三百七十萬甲にして、内耕地七十七萬三千甲、林野二百五十四萬六千甲、其他三十八萬八千甲なり。

今之を内地其他と比較するに、總面積に對する耕地の割合最も大なるは、關東州の三割一分六厘にして、臺灣は二割九厘を以て之に亞き、樺太の四厘最も小なり。林野に於ては樺太の八割九分五厘最も大にして、臺灣は六割八分六厘を以て第三位を占め、關東州の八分最も小なり。耕地及林野以外の土地の割合最も大なるは關東州の六割四厘にして、朝鮮の九分二厘最も小なり。

五 土地の利用

臺灣の總面積は三百七十萬甲にして、内耕地七十七萬三千甲、林野二百五十四萬六千甲、其他三十八萬八千甲なり。

今之を内地其他と比較するに、總面積に對する耕地の割合最も大なるは、關東州の三割一分六厘にして、臺灣は二割九厘を以て之に亞き、樺太の四厘最も小なり。林野に於ては樺太の八割九分五厘最も大にして、臺灣は六割八分六厘を以て第三位を占め、關東州の八分最も小なり。耕地及林野以外の土地の割合最も大なるは關東州の六割四厘にして、朝鮮の九分二厘最も小なり。

實數	耕 地			林 野			其 他			耕 地			林 野			其 他				
	朝鮮	樺太	關東州	臺灣	朝鮮	樺太	關東州	臺灣	朝鮮	樺太	關東州	臺灣	朝鮮	樺太	關東州	臺灣	朝鮮	樺太	關東州	
758,600	1,523,300	10,560,000	37,000,000	758,600	1,523,300	10,560,000	37,000,000	758,600	1,523,300	10,560,000	37,000,000	758,600	1,523,300	10,560,000	37,000,000	758,600	1,523,300	10,560,000	37,000,000	

北海道 八五二畝 五四七五〇 三〇九五二
 内地府縣 五二〇六畝 一六六二八五 七四五〇八〇
 一甲は九反七畝二十四歩。
 耕地は大正十一年末現在なり。
 林野は臺灣、樺太、關東州は大正十一年度末現在、朝鮮は大正十二年五月末日現在、内地及北海道は大正十年度末現在なり。

（以下は表の縦書き部分）

（以下は表の縦書き部分）

六 氣 温

臺灣は北回歸線に跨り、半は熱帯圏に位するが故に、内地に比すれば夏季長く、冬季短きも、その最高氣温は致べて内地より高しき謂ふにあらざる。而も冬季は頗る暖かにはて、高山ならざれば降雪なく、北部に於ては偶々霜を見ることなしとせざるも極めて稀なり。

今内地其の他と比較するに、累年平均氣温は我臺灣最も高きも、最高極度の氣温に至りては内地其の他の部分却つて高し。即ち臺東の三十九度(華氏百二度二分)は新潟の三十九度一分(華氏百二度四分)より一分低く、又臺北の三十七度五分(華氏九十九度五分)は京城と同しくして大阪の三十七度六分(華氏九十九度七分)より一分低し。更に恒春の三十四度九分(華氏九十四度八分)は大泊函館及札幌を除けば他の何れの地方よりも低し。

大正十一年平均		平均	最高の極	最低の極
臺 南	攝氏 華氏	攝氏 華氏	攝氏 華氏	攝氏 華氏
臺 中	攝氏 華氏	攝氏 華氏	攝氏 華氏	攝氏 華氏
臺 東	攝氏 華氏	攝氏 華氏	攝氏 華氏	攝氏 華氏
恒 春	攝氏 華氏	攝氏 華氏	攝氏 華氏	攝氏 華氏
臺 南	攝氏 華氏	攝氏 華氏	攝氏 華氏	攝氏 華氏
臺 中	攝氏 華氏	攝氏 華氏	攝氏 華氏	攝氏 華氏
臺 東	攝氏 華氏	攝氏 華氏	攝氏 華氏	攝氏 華氏
恒 春	攝氏 華氏	攝氏 華氏	攝氏 華氏	攝氏 華氏

旅順	一〇五	二〇五	三〇五	四〇五	五〇五	六〇五	七〇五	八〇五	九〇五	一〇〇五
關東州	一〇六	二〇六	三〇六	四〇六	五〇六	六〇六	七〇六	八〇六	九〇六	一〇〇六
大泊	一〇七	二〇七	三〇七	四〇七	五〇七	六〇七	七〇七	八〇七	九〇七	一〇〇七
朝	一〇八	二〇八	三〇八	四〇八	五〇八	六〇八	七〇八	八〇八	九〇八	一〇〇八
鞍山	一〇九	二〇九	三〇九	四〇九	五〇九	六〇九	七〇九	八〇九	九〇九	一〇〇九
鞍山	一一〇	二一〇	三一〇	四一〇	五一〇	六一〇	七一〇	八二〇	九二〇	一〇二〇
鞍山	一一一	二一一	三一	四一	五一	六一	七一	八二	九二	一〇二
鞍山	一一二	二一二	三一	四二	五二	六二	七二	八三	九三	一〇三
鞍山	一一三	二一三	三一	四三	五三	六三	七三	八四	九四	一〇四
鞍山	一一四	二一四	三一	四四	五四	六四	七四	八五	九五	一〇五
鞍山	一一五	二一五	三一	四五	五五	六五	七五	八六	九六	一〇六
鞍山	一一六	二一六	三一	四六	五六	六六	七六	八七	九七	一〇七
鞍山	一一七	二一七	三一	四七	五七	六七	七七	八八	九八	一〇八
鞍山	一一八	二一八	三一	四八	五八	六八	七八	八九	九九	一〇九
鞍山	一一九	二一九	三一	四九	五九	六九	七九	九〇	一〇〇	一一〇
鞍山	一二〇	二二〇	三一	五〇	六〇	七〇	八〇	九〇	一〇〇	一一〇

北海道	一〇一	二〇一	三〇一	四〇一	五〇一	六〇一	七〇一	八〇一	九〇一	一〇〇一
函館	一〇二	二〇二	三〇二	四〇二	五〇二	六〇二	七〇二	八〇二	九〇二	一〇〇二
札幌	一〇三	二〇三	三〇三	四〇三	五〇三	六〇三	七〇三	八〇三	九〇三	一〇〇三
旭川	一〇四	二〇四	三〇四	四〇四	五〇四	六〇四	七〇四	八〇四	九〇四	一〇〇四
旭川	一〇五	二〇五	三〇五	四〇五	五〇五	六〇五	七〇五	八〇五	九〇五	一〇〇五
旭川	一〇六	二〇六	三〇六	四〇六	五〇六	六〇六	七〇六	八〇六	九〇六	一〇〇六
旭川	一〇七	二〇七	三〇七	四〇七	五〇七	六〇七	七〇七	八〇七	九〇七	一〇〇七
旭川	一〇八	二〇八	三〇八	四〇八	五〇八	六〇八	七〇八	八〇八	九〇八	一〇〇八
旭川	一〇九	二〇九	三〇九	四〇九	五〇九	六〇九	七〇九	八〇九	九〇九	一〇〇九
旭川	一一〇	二一〇	三一〇	四一〇	五一〇	六一〇	七一〇	八二〇	九二〇	一〇二〇
旭川	一一一	二一一	三一	四一	五一	六一	七一	八二	九二	一〇二
旭川	一一二	二一二	三一	四二	五二	六二	七二	八三	九三	一〇三
旭川	一一三	二一三	三一	四三	五三	六三	七三	八四	九四	一〇四
旭川	一一四	二一四	三一	四四	五四	六四	七四	八五	九五	一〇五
旭川	一一五	二一五	三一	四五	五五	六五	七五	八六	九六	一〇六
旭川	一一六	二一六	三一	四六	五六	六六	七六	八七	九七	一〇七
旭川	一一七	二一七	三一	四七	五七	六七	七七	八八	九八	一〇八
旭川	一一八	二一八	三一	四八	五八	六八	七八	八九	九九	一〇九
旭川	一一九	二一九	三一	四九	五九	六九	七九	九〇	一〇〇	一一〇
旭川	一二〇	二二〇	三一	五〇	六〇	七〇	八〇	九〇	一〇〇	一一〇

(一)は等點下を示す。

七 雨 量

臺灣は南北に依り其の降雨期を異にす。即ち北部は十月より翌年三月迄の冬季六箇月、南部は五月より九月に至る夏期五箇月を雨期とす。北部は基隆附近最も降雨量多く、基隆に近き火燒寮(暖々街より約一里)は一年六千九百種を以て全島の第一位を占め、且つ世界有数の降雨地として知らる。南部に於ては阿里山の四千種最多量を示し、降雨量の最も少きは澎湖島にして一年の總量一千三百種なり。更に之を内地其他と比較するに、臺灣は全島を通じて一般に他の地方よりも降雨量多し。

地名	大正十一年 總雨量	累年總量 平均	大正十一年 最大日雨量	大正十一年 最大日雨量
臺灣	三六二	三六二	三〇	九一六
恒春	三六二	三六二	三〇	九一六
臺東	三〇〇	一七六	三〇	九一六
臺南	一七六	一七六	三〇	九一六
澎湖	一七六	一七六	三〇	九一六

青新東大長那 內地旭札
 森海京阪崎那 府 縣川嶋

1250 1150 1110 1050 1000 1150 1100

1150 1100 1050 1000 950 1000 950

1150 1100 1050 1000 950 1000 950

1150 1100 1050 1000 950 1000 950

北關樺大城京釜朝 火基蘆蘆阿
 函旅東州 泊太津城山鮮察隆北中山
 館道順

1250 1150 1100 1050 1000 1150 1100 1050 1000 1150 1100

1150 1100 1050 1000 950 1000 950 1000 950 1150 1100

1150 1100 1050 1000 950 1000 950 1000 950 1150 1100

1150 1100 1050 1000 950 1000 950 1000 950 1150 1100

八 人 口

臺灣の總人口は大正十一年末現在三百八十二萬人にして、内地人十七萬八千人、本島人三百六十一萬人、外國人二萬九千人なり。
 大正九年十月一日施行の國勢調査の結果に依れば、帝國の總人口は七千七百萬人にして、臺灣は實に其の四分七厘を占む。更に臺灣の人口を列國のそれに比すれば、總西(三百九十萬人)と丁抹(三百二十七萬人)との中間に位す。

一 種族別人口

種 族	總 數		百分比
	男	女	
内地人	一七、四八四	六、四七三	100
本島人	九、二一八	六、八八五	77.7
外國人	一、八三六	一、七三三	9.45
外國人	三、八三三	六、五五八	0.8

本表には平地居住の生蕃八萬三千六百六十四人を含まず、平地居住の蕃人四

萬八千八百三十六人は之を本島人中に算入す。

二 内地其の他との人口比較 (大正十一年十二月末現在)

	實數	百分比例	一方里に付
總數	九三三三三	100	一五五
臺灣	三〇二五八	三三	一〇九
朝鮮	一七五七六	一九	七三
樺太	一〇三三三	一一	四一
北海道	三三三三三	三六	一三三
内地府縣	四二〇〇〇	四五	一七五

本表の外租借地としての關東州(州内)は人口六十八萬六千八百九十三人を有し、一方里に付人口三千三百三十六人及大正九年十月一日現在南洋群島は人口五萬二千二百二十二人を有し、一方里に付人口三百二十二人を算す。

内地府縣及北海道は大正十一年十月一日現在なり。

九 本籍別内地人

臺灣在住内地人の總數は大正九年十月一日施行の國勢調査の結果に依れば、十六萬四千人にして、内熊本縣の二萬六千三百五十三人第一位を占め鹿兒島縣は一萬六千二百七十二人を以て之に亞き、福岡縣は遙かに下りて八千八百九十八人を以て第三位に在り、廣島、山口の兩縣順次に亞き其の最も少きは青森縣の二百八十二人なり。

府縣	人口	百分比例	順位
熊本縣	二六,三五三	一〇一	一
鹿兒島	一六,二七二	九九	二
福岡縣	八,八六六	五四	三
廣島	八,四四二	五二	四
山口	七,四四七	四五	五
佐賀	六,七六〇	四一	六
東京	六,三三三	三九	七

福島	静島	和歌	京師	茨城	三浦	長門	福井	千代	神奈	滋賀	山梨	鳥取
秋	秋	秋	秋	秋	秋	秋	秋	秋	秋	秋	秋	秋
三〇	三〇	二七	二六	二五	二四	二三	二二	二一	二〇	一九	一八	一七
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三

長官	大官	新兵	新官	愛知	愛知	岡崎	宮崎	高松	岐阜	石川	香川
六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六
二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五
八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八

富山 郡山 群 北 岩 秋 青
 山 梨 玉 眞 道 木 手 田 森
 海

内地人總數
九人を除く。

一六四、二六六人中内地に本籍を有せざる者二六六人、本籍不詳

三三 三三 三三 三三 三三 三三 三三 三三 三三 三三

三三 三三 三三 三三 三三 三三 三三 三三 三三 三三

一〇 在外臺灣人

在外臺灣人の總數は、大正九年十月一日施行の國勢調査の結果に依れば、四千七百八十五人にしてその大部分は支那に在留す。即ち支那に留臺灣人の總數は四千二百三十六人にして、就中その三千八十五人は對岸廈門に居住し、福州は七百六十六人、汕頭は二百三十六人を算す。

支那以外の地方に在りては、爪哇の二百十八人第二位を占め、海峽植民地の百五人之に距く。

支那	總數	
	男	女
福州	766	766
汕頭	236	236
廈門	385	385
支那	1,207	1,207
爪哇	188	188
海峽植民地	105	105
總數	2,403	2,403

智	藤	比	遜	香	福	真	新	嘉	嘉	爪	其	廣	抽
利	州	實	羅	港	甸	他	州	坡	地	哇	他	東	頭
一	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
一	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
一	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三

一一 在留外國人

臺灣在留外國人の總數は大正九年十月一日施行の國勢調査の結果に依れば、二萬三千六百六十四人なり。今之が國籍を辨ぬるに、支那人はその大部分を占め二萬三千四百六十七人を算し、英吉利人の八十九人、北米合衆國人の四十二人順次に亞く。

國籍	總數
支那	三、四六七
英吉利	八九
北米合衆國	四二
西班牙	三
智利	一〇
英領印度	五
ペネシユラ	四
比律賓	四

英	露	瑞	佛	葡	丁	葡	加	加	伯	波	漢
亞	亞	亞	蘭	蘭	蘭	蘭	蘭	蘭	蘭	蘭	蘭
三	三	三	一	一	一	一	一	一	一	一	一

本表の外、外國に國籍を有せざる者七九九人、國籍不詳三人あり。本表には、調査當日基隆港泊の外國船乗組員をも含むを以て國籍數比較的多し。

一一 臺灣語を話す内地人

内地人にして臺灣語を話すもの數は、明治三十八年の六千八百二十九人より、大正四年の一萬六千五百九十一人に増加し、更に大正九年には一萬七千二百七十三人に増加したるも、その内地人千に對する割合は、大正四年の百二十二・五分より、大正九年の百五人二分に減退したり。

	總數		男女別内地人千に付	
	男	女	男	女
明治三十八年	六八〇	八〇九	二九二	一七八
大正四年	一六九七	三三八	一三五	一六九
同 九年	一七三三	二〇七	一〇五	一六六

平均

本表は第一回及第二回戸口調査並に第一回國勢調査の結果にして、何れも十月一日現在なり。

本島人にして國語を解するもの、數は、明治三十八年の一萬一千三百七十人より、大正四年の五萬四千三百三十七人に増加し、更に大正九年には九萬九千六十五人に増加したるも、尙ほ本島人千に對し、僅かに二十八人六分を算するに過ぎず。

一三 國語を解する本島人

本島人にして國語を解するもの、數は、明治三十八年の一萬一千三百七十人より、大正四年の五萬四千三百三十七人に増加し、更に大正九年には九萬九千六十五人に増加したるも、尙ほ本島人千に對し、僅かに二十八人六分を算するに過ぎず。

年次	總數		男女別本島人千に付	
	男	女	男	女
明治三十八年	二,七〇	二,八〇	一,〇〇	一,七〇
大正四年	五,三三	五,一〇	二,一八	三,一五
同 九年	九,〇五	八,八〇	三,六六	五,一四

本表は第一回及第二回戸口調査並に第一回國勢調査の結果にして、何れも十月二日現在なり。

臺灣に於ける最近十一年間の婚姻、離婚、出生及死亡を觀るに、婚姻は大正元年の三萬七千九百より大正十一年は三萬七千八百に減し、離婚は同じく五千より四千に減し、出生は年により多少の差異あるも、大體に於ては増加の傾向を有し、大正元年の十四萬人より大正十一年の十六萬人に増加し、同じく死亡は年に依り非常の相違あり、大正七年の如き十二萬五千人の多きに達したるも、大正十一年には九萬五千人に減退したり。従つて出生の死亡超過数は年により甚しき懸隔あり、大正七年の如き僅かに二萬人に過ぎざりしか、大正十一年には六萬人以上に達したり。

一四 婚姻、離婚、出生、死亡

臺灣に於ける最近十一年間の婚姻、離婚、出生及死亡を觀るに、婚姻は大正元年の三萬七千九百より大正十一年は三萬七千八百に減し、離婚は同じく五千より四千に減し、出生は年により多少の差異あるも、大體に於ては増加の傾向を有し、大正元年の十四萬人より大正十一年の十六萬人に増加し、同じく死亡は年に依り非常の相違あり、大正七年の如き十二萬五千人の多きに達したるも、大正十一年には九萬五千人に減退したり。従つて出生の死亡超過数は年により甚しき懸隔あり、大正七年の如き僅かに二萬人に過ぎざりしか、大正十一年には六萬人以上に達したり。

年	婚姻	離婚	出生	死亡
大正元年	37,900	5,000	140,000	140,000
同二年	37,000	4,500	145,000	135,000
同三年	36,500	4,000	150,000	130,000
同四年	36,000	3,500	155,000	125,000
同五年	35,500	3,000	160,000	120,000
同六年	35,000	2,500	165,000	115,000
同七年	34,500	2,000	170,000	110,000
同八年	34,000	1,500	175,000	105,000
同九年	33,500	1,000	180,000	100,000
同十年	33,000	500	185,000	95,000
同十一年	32,500	0	190,000	90,000

同 十 一 年	同 十 年	同 九 年	同 八 年	同 七 年	同 六 年	同 五 年
毛公三	毛公元	毛公三	毛公二	毛公三	毛公元	毛公三
四三三	四三三	四三三	四三三	四三三	四三三	四三三
一六六元	一六六元	一六六元	一六六元	一六六元	一六六元	一六六元
九三三	九三三	九三三	九三三	九三三	九三三	九三三
六三三	六三三	六三三	六三三	六三三	六三三	六三三

一五 出生率

臺灣の出生率は之を最近十一年間に就て觀るに、年に依りて高低常ならずと雖、大正十年には人口千に付四十三人二分を以て最高度を示す。又之を内地人のみに就て觀るに、逐年増加の趨勢にありしも、大正七年以來降下の傾向を有せしも、大正十年には再び増加の傾向に復し大正十一年には三十六人九分に進したり。本島人の出生率は特に高低常ならずしも、大正十年には四十三人七分を以て最近十一年間の新記録を示せり。

更に之を内地其の他と比較するに、臺灣は其の割合最も高くして北海道と稍一致し、内地府縣は我臺灣に於ける内地人のみの出生率と相似たる所あり。又列國中出生率の最も高きは智利の三十九人(大正十年)なるが故に、我臺灣の出生率は世界に於て最も高き部類に屬す。

出生率

人口千に付出生数

平均	内地人	本島人	外國人
四十九	三十九	四十五	二八

同三年	同四年	同五年	同六年	同七年	同八年	同九年	同十年	同十一年
四二	四九	六一	六一	四六	四三	四三	四三	四三
六三	七三	七八	七八	七〇	七〇	七〇	七〇	七〇
三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九
六四	六四	六四	六四	六四	六四	六四	六四	六四
四九	四九	四九	四九	四九	四九	四九	四九	四九
三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三

二 内地其他との出生率累年比較 (人口統計)

同二年	同三年	同四年	同五年	同六年	同七年	同八年	同九年	同十年	同十一年
四九	四九	四九	四九	四九	四九	四九	四九	四九	四九
六九	六九	六九	六九	六九	六九	六九	六九	六九	六九
三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇
三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三
三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三
三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三
三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三

大正元年 同二年 同三年 同四年 同五年 同六年 同七年 同八年 同九年 同十年 同十一年

臺灣 朝鮮 樺太 關東州 北海道 内地府縣

臺灣の死亡率は之を最近十一年間に就て觀るに、一般に増加の傾向ありしも、大正十年には著しく低下し、人口千に付二十四人四分を以て最低の新記録を示せり。内地人の死亡率は之を本島人に比すれば甚だ低く、大正十一年には本島人二十六人七分なるに對し、内地人は僅かに十四人四分を示せり。

更に之を内地其他と比較するに、大體に於て死亡率の最も低きは關東州にして北海道之に亞き、朝鮮は内地府縣と稍一致し、我臺灣は樺太と相似たる所あり。又列國中死亡率の最も高きは智利及西班牙等にして大正十年には智利三十三人六分、西班牙二十一人四分を示せり。

一六 死亡率

臺灣の死亡率は之を最近十一年間に就て觀るに、一般に増加の傾向ありしも、大正十年には著しく低下し、人口千に付二十四人四分を以て最低の新記録を示せり。内地人の死亡率は之を本島人に比すれば甚だ低く、大正十一年には本島人二十六人七分なるに對し、内地人は僅かに十四人四分を示せり。

更に之を内地其他と比較するに、大體に於て死亡率の最も低きは關東州にして北海道之に亞き、朝鮮は内地府縣と稍一致し、我臺灣は樺太と相似たる所あり。又列國中死亡率の最も高きは智利及西班牙等にして大正十年には智利三十三人六分、西班牙二十一人四分を示せり。

一 死亡率

年	平均	内地人	本島人	外國人
大正元年	三三・三	二五・六	三三・八	二五・四
同 二 年	三三・三	二五・三	三三・八	二五・二
同 三 年	三二・一	二五・〇	三二・七	二五・一

同五年	三三三	三三三	六五五	一六九	三〇八	三四
同六年	三三五	三三一	三七一	三三〇	三〇五	三四
同七年	三三八	三〇七	三三三	三三一	三〇九	三四
同八年	三三五	三三九	三三一	二二六	三三九	三四
同九年	三三五	三三三	三三一	二二六	三三九	三四
同十年	三三三	三三八	三三七	二五三	二八三	三九
同十一年	三三一	三三三	三三三	二八四	?	?

同四年	三三三	三三三	三三三	一八〇	三〇〇	三〇〇
同三年	三三一	三三三	三三三	一九八	三〇四	三〇四
同二年	三三五	三三〇	三三五	一九七	一九四	一九三
大正元年	三三五	三三〇	三三五	一九九	三〇八	一九八
同十一年	三三一	三三三	三三三	一九〇	三〇〇	三〇〇
同十年	三三一	三三三	三三三	一九〇	三〇〇	三〇〇
同九年	三三一	三三三	三三三	一九〇	三〇〇	三〇〇
同八年	三三一	三三三	三三三	一九〇	三〇〇	三〇〇
同七年	三三一	三三三	三三三	一九〇	三〇〇	三〇〇
同六年	三三一	三三三	三三三	一九〇	三〇〇	三〇〇
同五年	三三一	三三三	三三三	一九〇	三〇〇	三〇〇

二 内地其の他との死亡率累年比較

臺灣 朝鮮 樺太 關東州 北海道 内地府縣

昭和十一年の人口は、明治三十八年十月一日施行の第一次人口調査の結果に依れば、三百萬なりしものか大正元年には三百三十五萬に増加し、更に大正十一年には三百八十二萬に達し過去十一年間に一割四分の増加を示せり。

更に人口増加の趨勢を内地其他と比較するに、増加の割合最も大なるは樺太にして、北海道之に亞き、關東州は第三位を占め、大正八年までは臺灣を内地とは殆んど其の歩調を一にす。

一七 人口の増加

臺灣の人口は、明治三十八年十月一日施行の第一次人口調査の結果に依れば、三百萬なりしものか大正元年には三百三十五萬に増加し、更に大正十一年には三百八十二萬に達し過去十一年間に一割四分の増加を示せり。

更に人口増加の趨勢を内地其他と比較するに、増加の割合最も大なるは樺太にして、北海道之に亞き、關東州は第三位を占め、大正八年までは臺灣を内地とは殆んど其の歩調を一にす。

一 最近十一年間の人口

年	總數	男	女	指數
大正元年	3,350,000	1,700,000	1,650,000	100
同二年	3,400,000	1,750,000	1,650,000	101
同三年	3,450,000	1,800,000	1,650,000	102
同四年	3,500,000	1,850,000	1,650,000	103
同五年	3,550,000	1,900,000	1,650,000	104

同 六年	三六	二四	一七	二四	一〇
同 七年	三〇	二五	一六	二四	一〇
同 八年	二八	二六	一五	二四	一〇
同 九年	二〇	二七	一三	二四	一〇
同 十年	二三	二八	一四	二四	一〇
同 十一年	二四	二九	一五	二四	一〇

同 六年	三六〇〇〇	一八四〇〇	一七三〇〇	一〇
同 七年	三六三〇〇	一八六一六	一七三三七	一〇
同 八年	三六〇〇〇	一八八八〇	一七三三三	一〇
同 九年	三六三〇〇	一九三七〇	一七三〇〇	一〇
同 十年	三六三〇〇	一九二五〇	一七二七〇	一〇
同 十一年	三六三〇〇	一九七四〇	一七二七〇	一〇

二 内地其の他との累年人口指数

(各年米現在)

善地居住の舊人を除き、平地の舊人は之を算入せり。

大正元年 臺灣 朝鮮 樺太 關東州 北海道 内地府縣

薩摩の蕃人は之をタイヤル、サイセツト、アモン、ツオウ、バイロン、アミ及
 ヤミの七種族に分つ。大正十一年末現在蕃社数は七百十四、戸數二萬二千五百二
 十四、人口十三萬三千人なるも、就中四萬八千八百三十六人は平地の蕃社に居住
 するか故に、實際蕃地に居住するもの數は八萬三千六百六十四人なり。
 各種族中人口最も多きはバイロン族にして總人口の三割一分六厘を占め、アミ
 族の二割八分六厘、タイヤル族の二割三分六厘等順次に亞く。

一八 蕃 人

種 族	總 數		百 分 比 例	
	男	女	男	女
總 數	13,000	6,376	100.0	100.0
タイヤル	3,101	1,514	23.8	23.6
サイセツト	1,130	562	8.6	8.8
アモン	2,237	1,123	17.2	17.6
ツオウ	1,977	985	15.1	15.4
バイロン	4,612	2,161	35.4	33.9

ア
 若手 一六〇〇
 中 一六〇〇
 老 一六〇〇
 本表中、平地の蕃社に居住する蕃人四萬八千八百三十六人は本島人として人口統計に計上せらる。

一九 行政區劃

臺灣の地方行政區劃は、幾多の變遷を経たる後、大正九年九月一日に至り、地方官々制に根本的改正を加へたり。即ち従來の十二廳を五州二廳に改め、五州は之を三市四十七郡に分ち、郡の下には三十四街、二百二十六庄を置き、二廳は之を七支廳に分ち、支廳の下には二街一庄十九區を置き、以て従來の行政區域を全く一變したり。

全	臺	新	臺	臺	高	臺	花
島	北	竹	中	南	雄	東	港
州	州	州	州	州	州	州	州
郡	九	八	二	二	九	一	一
支廳	七	一	一	一	一	一	一
市	三	一	一	一	一	一	一
街	六	四	四	八	六	一	一
庄	三	三	三	三	三	一	一
區	元	一	一	一	一	一	一

本表は大正十三年十月末現在とす

二〇 州及廳の面積

五州二廳中、面積の最大なるは、臺中州の四百七十八方里餘にして、高雄、臺南、花蓮港、新竹、臺北の順序を以て之に亞き、臺東廳は二百二十四方里を以て最小の地位を占む。

今之を内地府縣に比較すれば、臺中州は熊本、宮城の中間に、高雄州は山口、三重の中間に、臺南州は愛媛、千葉の中間に、花蓮港廳、新竹州及臺北州は和歌山、京都の中間に、臺東廳は鳥取、佐賀の中間に位す。

一 州及廳の面積

全	臺北	新竹	臺中	臺南
方里	478.5	366.3	366.6	242.4
百分比	100.0	76.6	76.6	50.7

和歌山縣	30,945	第1位
花港	30,010	第2位
新州	29,214	第3位
京都府	28,500	第4位
鳥取縣	28,488	第5位
佐賀縣	28,488	第6位

順位は、一、道三府四十三縣及州、縣の面積の順位を示す。

二 内地府縣との面積比較

熊本市	4,619	第1位
宮中	4,711	第2位
山口縣	4,811	第3位
三重縣	4,970	第4位
愛媛縣	4,970	第5位
三州	5,125	第6位
千葉縣	5,214	第7位

二 州及廳の人口

五州二廳中の人口の最多なるは臺南州の九十九萬四千九百九十九にして、臺中州は八十三萬四千九百九十九を以て之に亞き、以下臺北、新竹、高雄、花蓮港、臺東の順序を以てし、一方里の人口は同じく臺中州二千七百八十四人を以て最高度を示し、花蓮港廳の百六十九人最も低し。

今之を内地府縣に比較すれば、臺南州は山口、山形の中間に、臺中、臺北の兩州は岩手、青森の中間に、新竹州は山梨、沖繩の中間に、高雄州は沖繩、奈良の中間に位し、花蓮港及臺東の兩廳は人口餘りに少くして比較すへき類似の府縣なし

一 州及廳の人口

(大正十二年末現在普通府廳の人口を含む)

全	實數	百分比	一方里に付
臺南州	九,九四九,九九九	100.0	二,六四三
臺北州	八,四四四,四四四	84.8	二,一〇九
新竹州	五,五五五,五五五	55.8	一,三九〇

山梨 新 沖 高 奈 花 蘆
 梨 竹 繩 雄 真 遊 東
 縣 州 縣 州 縣 縣 縣

五九六〇〇
 五九三三二
 五六〇〇〇
 五六七〇〇
 五八二〇〇
 六二七〇〇
 五〇三〇〇

山梨 山 岩 蘆 蘆 青
 口 南 形 手 中 北 森
 縣 州 縣 縣 州 州 縣

人口
 一〇三、〇〇〇
 九八、〇〇〇
 八六、〇〇〇
 八〇、〇〇〇
 六八、〇〇〇
 六四、〇〇〇
 六〇、〇〇〇

二 内地府縣との人口比較

(内地府縣は天保十一年)

蘆 高 蘆 蘆
 中 南 雄 東 花
 州 州 州 縣 港
 蘆 蘆 州 州 縣

合計
 三三三
 三三三
 三三三
 三三三
 三三三

人口
 一七、〇〇〇
 一七、〇〇〇
 一七、〇〇〇
 一七、〇〇〇
 一七、〇〇〇

三 主要都市

臺灣には三市、三十六街あり、就中人口二萬以上の市及街は二十にして、その第一位を占むるは臺北市の十八萬三千、之に次ぐは臺南市の八萬一千五百、基隆街の五萬三千八百、嘉義街の四萬一千、高雄街の三萬八千五百、臺中市の三萬六千四百、新竹街の三萬五千百等なり。而して東部に於ける總所在地たる臺東街は僅かに七千五百、同じく花蓮港街は六千九百を有するのみなり。

次に州及廳の所在地たる三市、四街を内地其の他の都市に比較するに大正九年十月一日現在に俟れば、我が臺北市は東京、大阪、神戸、京都、名古屋、横濱、京橋、長崎の八市に並ひて實に第九位を占め、廣島市の上に位し、臺南市は平壤及釜山を伯仲して和歌山、靜岡兩市の中間に、高雄街は若松(福島)松江兩市の中間に、臺中市は四日市、小倉兩市の中間に、新竹街は小倉、佐賀兩市の中間に位す。而して臺東、花蓮港の兩街は共にその人口樺太の首府豊原より尠少し。

一 主要都市の人口

(大正十一年現在)

臺北市 十八萬三千

臺南市 八萬一千五百

基隆街 五萬三千八百

嘉義街 四萬一千

高雄街 三萬八千五百

臺中市 三萬六千四百

新竹街 三萬五千百

臺東街 七千五百

花蓮港街 六千九百

和歌山 二萬五千

靜岡市 二萬五千

若松(福島) 二萬五千

松江市 二萬五千

四日市 二萬五千

小倉市 二萬五千

佐賀市 二萬五千

豊原 二萬五千

大正九年十月一日現在

人口

臺北市 十八萬三千

臺南市 八萬一千五百

基隆街 五萬三千八百

嘉義街 四萬一千

高雄街 三萬八千五百

臺中市 三萬六千四百

新竹街 三萬五千百

臺東街 七千五百

花蓮港街 六千九百

和歌山 二萬五千

靜岡市 二萬五千

若松(福島) 二萬五千

松江市 二萬五千

四日市 二萬五千

小倉市 二萬五千

佐賀市 二萬五千

豊原 二萬五千

大正九年十月一日現在

人口

臺北市 十八萬三千

臺南市 八萬一千五百

基隆街 五萬三千八百

嘉義街 四萬一千

高雄街 三萬八千五百

臺中市 三萬六千四百

新竹街 三萬五千百

臺東街 七千五百

花蓮港街 六千九百

和歌山 二萬五千

靜岡市 二萬五千

若松(福島) 二萬五千

松江市 二萬五千

四日市 二萬五千

小倉市 二萬五千

佐賀市 二萬五千

豊原 二萬五千

大正九年十月一日現在

人口

臺北市 十八萬三千

臺南市 八萬一千五百

基隆街 五萬三千八百

嘉義街 四萬一千

高雄街 三萬八千五百

臺中市 三萬六千四百

新竹街 三萬五千百

臺東街 七千五百

花蓮港街 六千九百

和歌山 二萬五千

靜岡市 二萬五千

若松(福島) 二萬五千

松江市 二萬五千

四日市 二萬五千

小倉市 二萬五千

佐賀市 二萬五千

豊原 二萬五千

大正九年十月一日現在

人口

臺北市 十八萬三千

臺南市 八萬一千五百

基隆街 五萬三千八百

嘉義街 四萬一千

高雄街 三萬八千五百

臺中市 三萬六千四百

新竹街 三萬五千百

臺東街 七千五百

花蓮港街 六千九百

和歌山 二萬五千

靜岡市 二萬五千

若松(福島) 二萬五千

松江市 二萬五千

四日市 二萬五千

小倉市 二萬五千

佐賀市 二萬五千

豊原 二萬五千

大正九年十月一日現在

人口

臺北市 十八萬三千

臺南市 八萬一千五百

基隆街 五萬三千八百

嘉義街 四萬一千

高雄街 三萬八千五百

臺中市 三萬六千四百

新竹街 三萬五千百

臺東街 七千五百

花蓮港街 六千九百

和歌山 二萬五千

靜岡市 二萬五千

若松(福島) 二萬五千

松江市 二萬五千

四日市 二萬五千

小倉市 二萬五千

佐賀市 二萬五千

豊原 二萬五千

大正九年十月一日現在

人口

臺北市 十八萬三千

臺南市 八萬一千五百

基隆街 五萬三千八百

嘉義街 四萬一千

高雄街 三萬八千五百

臺中市 三萬六千四百

新竹街 三萬五千百

臺東街 七千五百

花蓮港街 六千九百

和歌山 二萬五千

靜岡市 二萬五千

若松(福島) 二萬五千

松江市 二萬五千

四日市 二萬五千

小倉市 二萬五千

佐賀市 二萬五千

豊原 二萬五千

大正九年十月一日現在

人口

臺北市 十八萬三千

臺南市 八萬一千五百

基隆街 五萬三千八百

嘉義街 四萬一千

高雄街 三萬八千五百

臺中市 三萬六千四百

新竹街 三萬五千百

臺東街 七千五百

花蓮港街 六千九百

和歌山 二萬五千

靜岡市 二萬五千

若松(福島) 二萬五千

松江市 二萬五千

四日市 二萬五千

小倉市 二萬五千

佐賀市 二萬五千

豊原 二萬五千

大正九年十月一日現在

人口

臺北市 十八萬三千

臺南市 八萬一千五百

基隆街 五萬三千八百

嘉義街 四萬一千

高雄街 三萬八千五百

臺中市 三萬六千四百

新竹街 三萬五千百

臺東街 七千五百

花蓮港街 六千九百

和歌山 二萬五千

靜岡市 二萬五千

若松(福島) 二萬五千

松江市 二萬五千

四日市 二萬五千

小倉市 二萬五千

佐賀市 二萬五千

豊原 二萬五千

大正九年十月一日現在

人口

臺北市 十八萬三千

臺南市 八萬一千五百

基隆街 五萬三千八百

嘉義街 四萬一千

高雄街 三萬八千五百

臺中市 三萬六千四百

新竹街 三萬五千百

臺東街 七千五百

花蓮港街 六千九百

和歌山 二萬五千

靜岡市 二萬五千

若松(福島) 二萬五千

松江市 二萬五千

四日市 二萬五千

小倉市 二萬五千

佐賀市 二萬五千

豊原 二萬五千

大正九年十月一日現在

人口

臺北市 十八萬三千

臺南市 八萬一千五百

基隆街 五萬三千八百

嘉義街 四萬一千

高雄街 三萬八千五百

臺中市 三萬六千四百

新竹街 三萬五千百

臺東街 七千五百

花蓮港街 六千九百

和歌山 二萬五千

靜岡市 二萬五千

若松(福島) 二萬五千

松江市 二萬五千

四日市 二萬五千

小倉市 二萬五千

佐賀市 二萬五千

豊原 二萬五千

大正九年十月一日現在

人口

臺北市 十八萬三千

臺南市 八萬一千五百

基隆街 五萬三千八百

嘉義街 四萬一千

高雄街 三萬八千五百

臺中市 三萬六千四百

新竹街 三萬五千百

臺東街 七千五百

花蓮港街 六千九百

和歌山 二萬五千

靜岡市 二萬五千

若松(福島) 二萬五千

松江市 二萬五千

四日市 二萬五千

小倉市 二萬五千

佐賀市 二萬五千

豊原 二萬五千

大正九年十月一日現在

人口

臺北市 十八萬三千

臺南市 八萬一千五百

基隆街 五萬三千八百

嘉義街 四萬一千

高雄街 三萬八千五百

臺中市 三萬六千四百

新竹街 三萬五千百

臺東街 七千五百

花蓮港街 六千九百

和歌山 二萬五千

靜岡市 二萬五千

若松(福島) 二萬五千

松江市 二萬五千

四日市 二萬五千

小倉市 二萬五千

佐賀市 二萬五千

豊原 二萬五千

大正九年十月一日現在

人口

臺北市 十八萬三千

臺南市 八萬一千五百

基隆街 五萬三千八百

嘉義街 四萬一千

高雄街 三萬八千五百

臺中市 三萬六千四百

新竹街 三萬五千百

臺東街 七千五百

花蓮港街 六千九百

和歌山 二萬五千

靜岡市 二萬五千

若松(福島) 二萬五千

松江市 二萬五千

四日市 二萬五千

小倉市 二萬五千

佐賀市 二萬五千

豊原 二萬五千

大正九年十月一日現在

人口

臺北市 十八萬三千

臺南市 八萬一千五百

基隆街 五萬三千八百

嘉義街 四萬一千

高雄街 三萬八千五百

臺中市 三萬六千四百

新竹街 三萬五千百

臺東街 七千五百

花蓮港街 六千九百

和歌山 二萬五千

靜岡市 二萬五千

若松(福島) 二萬五千

松江市 二萬五千

市街名	總數	内地人	本島人	外國人	順位
臺北市(臺北州)	105,533	97,638	29,126	2,369	一
臺南市(臺南州)	85,568	78,335	25,000	2,333	二
基隆街(臺北州)	85,628	78,335	25,000	2,333	三
嘉義街(臺南州)	80,157	72,626	22,487	2,139	四
高雄街(高雄州)	76,511	70,123	22,487	2,139	五
臺中市(臺中州)	75,442	69,092	22,487	2,139	六
新竹街(新竹州)	75,121	68,811	22,487	2,139	七
鹿港街(臺中州)	73,472	67,121	22,487	2,139	八
大溪街(新竹州)	73,472	67,121	22,487	2,139	九
斗六街(臺南州)	72,709	66,358	22,487	2,139	一〇
清水街(臺中州)	72,126	65,775	22,487	2,139	一一
麻豆街(臺南州)	71,926	65,575	22,487	2,139	一二
屏東街(高雄州)	71,811	65,460	22,487	2,139	一三
埔里街(臺中州)	71,028	64,677	22,487	2,139	一四

市街名	總數	内地人	本島人	外國人	順位
豐原街(同)	33,582	30,000	3,582	0	一五
員林街(同)	33,582	30,000	3,582	0	一六
淡水街(臺北州)	33,333	29,751	3,582	0	一七
南投街(臺中州)	33,100	29,518	3,582	0	一八
宜蘭街(臺北州)	33,056	29,474	3,582	0	一九
馬公街(高雄州)	33,000	29,418	3,582	0	二〇
臺東街(臺東廳)	32,928	29,346	3,582	0	二一
花蓮港街(花蓮港廳)	32,928	29,346	3,582	0	二二

本表には、人口二萬以上の市及街のみを挙げ、且つ廳所在地たる臺東、花蓮、港兩街を漏す。

二 内地其他の都市との人口比較 (大正十年末現在)

京	3,221,622
長	1,253,822
北	1,253,822

新	佐	大	眞	豊	産	花
竹	賀	泊	岡	原	東	蓮
三	三	三	一	八	七	六
五	五	五	〇	九	三	四
七	六	六	〇	九	九	四
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇

内地及樺太は大正九年十月一日現在なり。

廣	函	小	札	和	平	釜	静	若	高	松	四	臺	小
島	館	樽	幌	山	南	山	岡	島	雄	江	市	中	倉
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇

二三 農業戸數

臺灣の農業戸數は三十八萬五千戸にして、總戸數の五割三分四厘を占め、農業者一月宛平均耕地面積は二甲に當る。

今之を内地其の他と比較するに總人口に對する農業戸數の割合最も大なるは朝鮮の八割七厘にして臺灣は第二位を占め、樺太は僅かに二割餘を以て最下位に在り。

農業者一月宛平均耕地面積の最も大なるは北海道の四町八段にして樺太の二町九段之に亞き臺灣は第四位を占め、内地府縣は一町歩を以て最下位に在り。

農業者	農業戸數	總戸數百に	
		付農業戸數	當耕地面積
臺灣	385,000	55.7	2.0
朝鮮	3,750,000	87.0	1.8
樺太	25,000	3.7	2.2
關東州	25,000	3.7	2.2
關東州	25,000	3.7	2.2

北海道
内地府縣

一七三三
五二八二五

本表は大正十一年末の事實とす。

六八

八

北海道の人口は、大正十一年末に於ては、一七三三、五二八二人に達し、前年比で増加した。この増加は、内地府縣からの移住によるものが多い。内地府縣の人口は、大正十一年末に於ては、五二八二、五〇〇人にとり、前年比で増加した。この増加は、内地府縣からの移住によるものが多い。内地府縣の人口は、大正十一年末に於ては、五二八二、五〇〇人にとり、前年比で増加した。この増加は、内地府縣からの移住によるものが多い。

二四 耕地面積

臺灣の耕地は總面積の二割餘を占め、其の面積は七十七萬四千甲にして、内田三十七萬六千甲、畑三十九萬七千甲なり。

今之を内地其他と比較するに耕地面積の總面積に對する割合の最大なるは關東州の三割一分六厘にして、臺灣は之に亞き、朝鮮の一割九分四厘はその第三位を占む。耕地の内田の割合畑より大なるは内地府縣のみにして、樺太の如きは全然田を有せず。

總數	耕地面積		田畑百分比	
	田	畑	田	畑
臺灣	七十七萬六千甲	三十九萬七千甲	六六	三三
朝鮮	四十七萬八千甲	一五萬三千甲	七五	二五
樺太	一五萬三千甲	一萬一千甲	一〇〇	〇
關東州	三〇萬五千甲	一〇萬五千甲	七三	二六
北海道	六六萬〇千甲	一五萬五千甲	七七	二三

内地府縣

本表は大正十一年末の事實をす。

一甲は九段七畝二十四歩。

内地及北海道は農商務省刊行農商統計表に依る。
朝鮮、樺太、關東州は各屬統計書に依る。

表八

一七五

内地府縣	五二、〇〇〇	三、〇〇〇	三、三〇〇	表八
北海道	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一七五
朝鮮	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	
樺太	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	
關東州	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	

内地府縣	五二、〇〇〇	三、〇〇〇	三、三〇〇	表八
北海道	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一七五
朝鮮	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	
樺太	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	
關東州	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	

二五 水利

臺灣に於ける埤圳の数は、一萬二千二百四十三にして、内水利組合一公共埤圳百十五、認定外埤圳一萬二千二百二十七なり。又其の灌漑面積は三十二萬四千甲にして、内其の七割は公共埤圳の灌漑に屬す。

埤圳數	灌漑面積	灌漑面積 百分比
總數	三二四六三	100.0
水利組合	一四六	0.4
公共埤圳	三二三一七	99.6
認定外埤圳	六二六	1.9

本表は大正十一年度末の事實をす。

難得の農産物は、大正十一年中の總生産價額一億五千六百萬圓にして、内普通作物九千七百萬圓、特用作物四千六百萬圓、園藝作物千三百萬圓なり。
更に之を作物別に觀るに、米は八千百萬圓を以て第一位を占め、甘蔗は三千五百萬圓を以て之に亞き、甘蔗の千四百萬圓、蔬菜類の六百萬圓、苧麻の四百萬圓、茶の五百萬圓、落花生の百九十萬圓、豆類の百五十萬圓、柑橘の百萬圓等順次に亞く。

二六 農産

難得の農産物は、大正十一年中の總生産價額一億五千六百萬圓にして、内普通作物九千七百萬圓、特用作物四千六百萬圓、園藝作物千三百萬圓なり。
更に之を作物別に觀るに、米は八千百萬圓を以て第一位を占め、甘蔗は三千五百萬圓を以て之に亞き、甘蔗の千四百萬圓、蔬菜類の六百萬圓、苧麻の四百萬圓、茶の五百萬圓、落花生の百九十萬圓、豆類の百五十萬圓、柑橘の百萬圓等順次に亞く。

普通作物	生産價額	生産價額 百分比例	作付面積	收穫高
米	八,000,000	100.0	一	一
甘蔗	3,500,000	57.1	一	一
豆類	1,500,000	23.8	一	一
小麥	2,000,000	31.7	一	一

橫	0.1	六	四九六〇四三
鳳	0.1	一三	九〇三〇七
機	0.1	七	四五六三
李	0.1	壹元	四二六七八
蔬	0.1		
其	0		
總			

其	0.1		
特	0.1		
甘	0.1	一	六三三六六六
茶	0.1	壹元	八八八八八
落	0.1	二	三三三三三
煙	0.1	三	四四四四四
黃	0.1	四	五五五五五
草	0.1	五	六六六六六
胡	0.1	六	七七七七七
藍	0.1	七	八八八八八
其	0.1	八	九九九九九
園	0.1	九	〇〇〇〇〇
粵	0.1	一〇	一一一一一
柑	0.1	一一	一二二二二
總	0.1	一二	一三三三三

Table with multiple columns and rows, likely a detailed production or financial report. The text is very faint and difficult to read.

二七 畜産

臺灣の畜産物生産總價額は大正十一年に三千萬圓を算し、内家畜生産二千五百萬圓、家禽生産四百萬圓、牛乳三十萬圓なり。
 家禽生産中、豚は二千三百萬圓を以て第一位を占め、水牛の百三十萬圓之に亞き、家禽生産中第一位を占むるは鶏の三百二十二萬圓なり。

種類	生産價額	生産價額 百分比例
總額	三,〇〇〇,〇〇〇	100
家畜	二,五〇〇,〇〇〇	83.3
水牛	三〇〇,〇〇〇	10.0
黄牛	二,二〇〇,〇〇〇	73.3
其他	三〇〇,〇〇〇	10.0
豚	三,〇〇〇,〇〇〇	100.0
山羊
其他
羊

本館に於ては、凡そ各書の内容を、
 著者の姓名、書名、巻数、頁数、
 刊行年、発行所、価格、などを、
 簡明に記述し、且つ、必要なる
 事項は、別表に附載せしむ。

家	鶏	鶩	鴨	鵝	牛	乳
100	110	120	130	140	150	160

本館に於ては、凡そ各書の内容を、
 著者の姓名、書名、巻数、頁数、
 刊行年、発行所、価格、などを、
 簡明に記述し、且つ、必要なる
 事項は、別表に附載せしむ。

二八 林 産

臺灣の林産物生産總價額は大正十一年に二千百萬圓を算し、内官行生産額三百六十萬圓、一般生産額七百五十六萬圓なり。
官行生産額中第一位を占むるは丸太の二百三十萬圓にして、一般生産額中にては薪の二百七十五萬圓第一位を占む。

	價 額	百分比
總 官行生産額	3,600,000	18.0%
丸 太	2,300,000	11.5%
製 材	1,300,000	6.5%
副 生 品	600,000	3.0%
一般生産額	7,560,000	37.5%
木 材	1,200,000	6.0%
竹 材	600,000	3.0%

二九 鑛 産

臺灣の鑛産總價額は大正十一年に一千三百萬圓を算し、内石炭は總生産價額の約八割、即ち一千五十萬圓を以て第一位を占め、金は九十萬圓を以て之に亞き、銅の七十萬圓、石油の二十一萬圓等順次之に亞く。

品名	單位	產 額	價 額	價額百分比
石炭	噸	一,三〇七,四〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	100.0
金	兩	一八〇,〇〇〇	九〇〇,〇〇〇	90.0
銅	斤	一八五,八〇〇	六〇〇,〇〇〇	60.0
石油	石	二五二,〇〇〇	二〇〇,〇〇〇	20.0
金銅鑛	貫	三三,七〇〇	一〇〇,〇〇〇	10.0
銅鑛	貫	一七〇,〇〇〇	六〇,〇〇〇	6.0
硫黃	斤	五,四〇〇	一〇,〇〇〇	1.0
銀	兩	一〇,〇〇〇	一〇,〇〇〇	1.0
砂金	兩	一〇,〇〇〇	一〇,〇〇〇	1.0
砂鐵	斤	一〇,〇〇〇	一〇,〇〇〇	1.0

産物の水産總額は大正十一年には二千百萬圓以上に達し、内水産漁獲物六百萬圓、養殖漁獲物三百萬圓、水産製造物二百二十萬圓、製鹽七十八萬圓なり。更に之を品別に見れば、總額の百五十萬圓第一位を占め、加納魚の百十一萬圓、虱目魚の百十萬圓、車鮪の八十萬圓、鯖の七十萬圓等順次に亞く。

三〇 水産

品名	金額	百分比
加納魚	1,111,000	55.5
虱目魚	1,000,000	50.0
車鮪	800,000	40.0
鯖	700,000	35.0
製鹽	780,000	39.0
水産製造物	220,000	11.0
養殖漁獲物	300,000	15.0
水産漁獲物	600,000	30.0
總額	2,000,000	100.0

産物の水産總額は大正十一年には二千百萬圓以上に達し、内水産漁獲物六百萬圓、養殖漁獲物三百萬圓、水産製造物二百二十萬圓、製鹽七十八萬圓なり。更に之を品別に見れば、總額の百五十萬圓第一位を占め、加納魚の百十一萬圓、虱目魚の百十萬圓、車鮪の八十萬圓、鯖の七十萬圓等順次に亞く。

[Faint, illegible text on page 112]

三一 工業

臺灣の工業總生産價額は、大正十一年に二億一千五百萬圓を算し、内砂糖の二億二千萬圓は群を抜いてその第一位を占め、粗糖の二千五百萬圓、酒精の千六百萬圓、精米の千三百萬圓、再製茶の九百萬圓等順次に続く。

品名	生産價額	百分比例
總類	二,一五〇,〇〇〇	100
砂糖	二,二〇〇,〇〇〇	102
粗糖	二,五〇〇,〇〇〇	116
酒精	一,六〇〇,〇〇〇	74
再製茶	九〇〇,〇〇〇	42
鐵工及鑄物等	三,〇〇〇,〇〇〇	140
木製品	二,七〇〇,〇〇〇	125
セメント	三,五〇〇,〇〇〇	163

其	製	金	數	石	油	味	金	調	煉	通	染
他	粉	銀	瓦	灰	及	增	銀	合	肥	瓦	色
		紙	及		精	醬	細	料		類	
			層			油	工				

三	三	一	一	三	三	一	一	一	一	二	三
三	三	六	六	三	三	三	三	三	三	三	三
三	三	六	六	三	三	三	三	三	三	三	三

元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

三二糖業

臺灣の糖業は大正十二年期に於て、公稱資本額二億七千萬圓、作業工場數百五十六、許可作業能力三萬六千四百八十噸を有し、其の製糖高五億九千二百萬斤に達す。就中新式製糖會社の數は十三にして作業工場數四十四、許可作業能力三萬四千六百五十噸を有し、その製糖高五億八千百萬斤を算す。

總數	公稱資本額	作業工場數	許可作業能力	製糖高	製糖高百分比
新式製糖會社	三,七〇〇,〇〇〇	一	三,〇〇〇	五,三〇〇,〇〇〇	一〇〇
臺灣製糖	三,〇〇〇,〇〇〇	一〇	八,七〇〇	一,三〇〇,〇〇〇	六三
東洋製糖	三,〇〇〇,〇〇〇	六	四,〇〇〇	九〇〇,〇〇〇	一五
明治製糖	一,〇〇〇,〇〇〇	五	一,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一七
帝國製糖	一,〇〇〇,〇〇〇	五	一,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一七
新高製糖	一,〇〇〇,〇〇〇	五	一,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一七
鹽水港製糖	一,〇〇〇,〇〇〇	六	一,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一七

大正十二年期さば大正十一年十一月より同十二年十月に至る期間を云ふ。

大日本製糖	1,000,000	11	1,000,000	1,000,000	11
遼南製糖	1,000,000	11	1,000,000	1,000,000	11
新竹製糖	1,000,000	11	1,000,000	1,000,000	11
林本源製糖	1,000,000	11	1,000,000	1,000,000	11
沙龍製糖	1,000,000	11	1,000,000	1,000,000	11
龍東製糖	1,000,000	11	1,000,000	1,000,000	11
新製糖	1,000,000	11	1,000,000	1,000,000	11
吹其精糖	1,000,000	11	1,000,000	1,000,000	11
舊式精糖	1,000,000	11	1,000,000	1,000,000	11

三 貿易

臺灣の貿易は之を外國貿易及内地貿易(臺灣内地間貿易)の二種に分つべきも、今之を總括すれば明治三十年の三千一百萬圓より大正元年の二億三千五百萬圓に達したり。然るに大正二三の兩年は砂糖の減産と一般商況の不振に依り少しく減退したるも大正五年には世界大戦の影響を受けて、一億七千七百萬圓に達し、大正六年には二億圓を越え、大正八年には更に三億圓を突破し、大正九年には三億八千九百萬圓と云ふ新紀錄を作り、之を大正元年に比すれば實に二十一割の増加にして、人口一人當百六圓を算す。然るに大正十年及十一年には世界經濟界の不況に伴ひ再び二億七、八千萬圓に減退し、人口一人當も亦七十二六圓に下れり。

次に貿易總額に對する内外兩貿易の割合を觀るに内地貿易は常に過半數を占め、少きも七割、多きは七割八分に達す。

一 貿易總表

三 内地貿易

年	總額	指數	輸出	輸入	輸入超過
大正元年	100	100	100	100	0
二年	105	105	105	105	0
三年	110	110	110	110	0
四年	115	115	115	115	0
五年	120	120	120	120	0
六年	125	125	125	125	0
七年	130	130	130	130	0
八年	135	135	135	135	0
九年	140	140	140	140	0
十年	145	145	145	145	0
十一年	150	150	150	150	0

(一)は輸出超過なり。

二 外國貿易

年	總額	指數	外國貿易	内地貿易	外國貿易	内地貿易	平均
大正元年	100	100	100	100	100	100	100
二年	105	105	105	105	105	105	105
三年	110	110	110	110	110	110	110
四年	115	115	115	115	115	115	115
五年	120	120	120	120	120	120	120
六年	125	125	125	125	125	125	125
七年	130	130	130	130	130	130	130
八年	135	135	135	135	135	135	135
九年	140	140	140	140	140	140	140
十年	145	145	145	145	145	145	145
十一年	150	150	150	150	150	150	150

三四 對手國別外國貿易

臺灣の外國貿易は大體に於て輸入超過を示す。而して對手國中支那は累年主要の地位に在り、即ち輸出貿易總額に對する其の割合は少きも二割八分五厘、多きは四割四分を占め、輸入貿易に於ては更にその割合大にして、少きも三割四分、多きは四割九分を占む。

今大正十一年の外國貿易に就て觀るに、貿易總額六千七百萬圓中、輸出額は三千萬圓にして、就中支那の一千萬圓最も多く、總額の三割四分に當り、北米合衆國の七百七十萬圓、香港の四百三十萬圓、關領印度の三百三十萬圓等順次之ニ亞く。輸入額三千七百萬圓中第一位を占むるは支那の一千八百二十萬圓にして、總額の四割九分に當り、關領印度の三百五十萬圓、北米合衆國の三百三十萬圓、關東州の三百萬圓、英吉利の百五十萬圓、英領印度及海峽植民地の百二十萬圓等順次に亞く。

一 輸 出

支那	大正七年					
	同十年	同九年	同八年	同七年	同六年	同元年
總額	1,234,567	1,123,456	1,012,345	901,234	890,123	789,012
支那	1,123,456	1,012,345	901,234	890,123	789,012	678,901
英領印度	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
英領緬甸	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
英領馬來	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
英領香港	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
英領廣東	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
英領福建	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
英領浙江	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
英領山東	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
英領河南	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
英領湖北	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
英領湖南	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
英領江西	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
英領安徽	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
英領江蘇	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
英領上海	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
英領浙江	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
英領福建	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
英領廣東	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
英領香港	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
英領馬來	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
英領緬甸	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
英領印度	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
其他諸國	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000

支那	大正七年					
	同十年	同九年	同八年	同七年	同六年	同元年
總額	1,234,567	1,123,456	1,012,345	901,234	890,123	789,012
支那	1,123,456	1,012,345	901,234	890,123	789,012	678,901
英領印度	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
英領緬甸	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
英領馬來	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
英領香港	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
英領廣東	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
英領福建	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
英領浙江	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
英領山東	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
英領河南	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
英領湖北	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
英領湖南	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
英領江西	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
英領安徽	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
英領江蘇	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
英領上海	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
英領浙江	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
英領福建	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
英領廣東	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
英領香港	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
英領馬來	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
英領緬甸	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
英領印度	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
其他諸國	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000

二輪入

三五 支那香港及南洋貿易

臺灣の外國貿易中、臺灣と最も密接の關係を有する支那香港及南洋との貿易を再檢するに、年に依り多少の相異あるも、大體に於て常に重要の地位を占む。即ち大正十一年に就て觀るに、輸出額は一千九百七十萬圓にして、輸出貿易總額の六割四分四厘を占め、輸入貿易は二千四百萬圓にして、輸入貿易總額の六割四分六厘に當れり。

輸出

支那	香港	南洋	總計
大正十一年	1,970,000	430,000	2,400,000
同十年	1,870,000	410,000	2,280,000
同九年	1,750,000	390,000	2,140,000
同八年	1,650,000	370,000	2,020,000
同七年	1,550,000	350,000	1,900,000
同六年	1,450,000	330,000	1,780,000
同元年	1,350,000	310,000	1,660,000

本表の南洋とは英領海峽植民地、英領ボルネオ、蘭領印度、比律賓、英領印度、佛領印度、暹羅及濠太刺利を指す、以下同し。

三六 重要品別外國貿易

臺灣の外國貿易中輸出品の主要なるものは茶、砂糖、石炭、樟腦、燐寸、綿織物等なり。今大正十一年に就て之を觀るに茶は九百五十五萬圓を以て第一位を占め、石炭の五百七十二萬圓、樟腦の四百四十二萬圓、砂糖の二百八十三萬圓、綿織物の百七十七萬圓等順次之に亞く。

次に輸入品の主要なるものは豆油槽、砂糖、阿片、米、木材及板、石油、包糖、豆類等にして、大正十一年には豆油槽の七百八十萬圓第一位を占め、砂糖の六百萬圓、豆類の二百九十萬圓、木材及板の二百十五萬圓、包糖の百七十萬圓、阿片の百七十萬圓、石油の百三十七萬圓等順次之に亞く。

一 輸 出

	大正二年	同十年	同九年	同八年	同七年	同六年	同元年
茶	九百五十五	七百九十九	六百〇〇	八百〇〇	八百三三	四百五七	六百〇〇
砂糖	二百八十三	二百三三	二百九七	二百六六	二百三三	二百五七	二百七九

三七 重要品別内地貿易

臺灣の内地貿易中移出品の主要なるものは、砂糖、米、酒精、樟腦及樟腦油、
 芭蕉實、銅、鐵筋等なり。今大正十一年に就て之を觀るに、砂糖は八千四百五十
 萬圓を以て第一位を占め、米の一千三百六十萬圓、芭蕉實の六百九十萬圓、樟腦
 及樟腦油の四百萬圓、銅の二百萬圓、鐵筋の百八十四萬圓、酒精の百八十萬圓等
 順次之に亞く。

次に移入品の主要なるものは、綿織及絹織布、各種機械及同部分品、肥料、鹹
 魚及乾魚、鐵、酒類、木材及板材、建築材料等にして、大正十一年には綿織及絹
 織布六百四十萬圓を以て第一位を占め、各種機械及同部分品の五百五十六萬圓、
 酒類の五百五十五萬圓、各種肥料の四百四十萬圓、鐵の四百三十九萬圓、鹹魚及乾
 魚の四百二十萬圓、木材及板材の二百九十萬圓等順次之に亞く。

一 移出

三八 港別貿易

大正十一年に於ける臺灣の輸移出入貿易總額二億七千七百萬圓を港別に觀れば、基隆の一億五千萬圓第一位を占め、總額の五割四分一厘に當り、高雄の一億一千萬圓之に亞て三割八分六厘を占め、安平の八百八十四萬圓、淡水の二百九十九萬圓を始め殘餘の諸港は之を合算するも尙ほ僅かに總額の八分八厘を占むるに過ぎず。

今之を内地其の他の諸港に比較するに、基隆は横濱、神戸、大阪、大連に亞て第五位を占めて釜山の上に位し、高雄は釜山と仁川の中間に在りて第七位を占む。更に安平は函館と敦賀との中間に、淡水は伏木と青森との中間に位す。

港名	總額	輸出	輸入
横濱	一,500,000,000	850,000,000	650,000,000
神戸	1,100,000,000	600,000,000	500,000,000
大坂	884,400,000	480,000,000	404,400,000
大連	800,000,000	400,000,000	400,000,000
釜山	1,100,000,000	550,000,000	550,000,000
仁川	800,000,000	400,000,000	400,000,000
函館	200,000,000	100,000,000	100,000,000
敦賀	200,000,000	100,000,000	100,000,000
伏木	200,000,000	100,000,000	100,000,000
青森	200,000,000	100,000,000	100,000,000
その他	200,000,000	100,000,000	100,000,000
合計	27,700,000,000	14,000,000,000	13,700,000,000

青	淡	伏	敦	安	函	仁	高	釜	基
森	水	木	賀	平	館	川	雄	山	盛
二五三	二八七	三〇四	三二二	三三〇	三三九	三四八	三五七	三六六	三七五
二五三	二八七	三〇四	三二二	三三〇	三三九	三四八	三五七	三六六	三七五
二五三	二八七	三〇四	三二二	三三〇	三三九	三四八	三五七	三六六	三七五

漢及朝鮮の輸出中には移出を、輸入中には移入を含む。

三九 財政

臺灣總督府特別會計が全く國庫の補助を受けずして、獨立の實を擧ぐるに至りしは、明治三十八年度なりき。而して同年度の歳入は僅かに二千五百萬圓に過ぎざりしか、爾來年々共に其の額を増大し、大正八年度には一億圓を突破し、大正九年度には一億一千九百萬圓を以て新紀錄を作りたり。然るに大正十年度よりは更に減退を示し、大正十二年度には九千九百萬圓を豫算せり。

次に歳入中其の主要部分を占むるは官業及官有財産收入にして、其の歳入總額に對する割合は年に依り多少の高低あるも、少きは三割九分、多きは六割九分を占む。歳出は明治三十八年度の二千萬圓より、大正八年度の七千二百萬圓に増加し、更に大正九年度には九千五百萬圓に達し、大正十年度には少く減退を示したるも、大正十一年度には九千六百萬圓に増額し、大正十二年度には歳入を同じく九千九百萬圓を豫算せり。

明治十一年度	歳入		歳出	
	總額	租稅	總額	租稅
三,五〇〇,〇〇〇	七,〇〇〇,〇〇〇	三,〇〇〇,〇〇〇	四,〇〇〇,〇〇〇	三,〇〇〇,〇〇〇
三,五〇〇,〇〇〇	七,〇〇〇,〇〇〇	三,〇〇〇,〇〇〇	四,〇〇〇,〇〇〇	三,〇〇〇,〇〇〇
三,五〇〇,〇〇〇	七,〇〇〇,〇〇〇	三,〇〇〇,〇〇〇	四,〇〇〇,〇〇〇	三,〇〇〇,〇〇〇

歳入百分比例

同 六年度 〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇〇
 同 七年度 〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇〇
 同 八年度 〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇〇
 同 九年度 〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇〇
 同 十年度 〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇〇
 同 十一年度 〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇〇
 同 十二年度 〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇〇
 本表中大正十年度迄は決算、大正十一年度は現計、大正十二年度は豫算なり。

四〇 專賣

臺灣の專賣は現在阿片、食鹽、樟腦、煙草及酒の五種なるが、就中酒は大正十一年七月以降の實施さす。今最近十一年間に於ける專賣の賣渡價額を觀るに、大正元年度に千七百萬圓なりしものが、大正六年度には二千萬圓を越ゆるに至り、更に大正九年度には三千萬圓を突破したるも翌大正十年度には經濟界の世界的不況に伴ひ樟腦の如きは特に前年度の九百萬圓より三百萬圓に減退したる爲め、總額も二千三百萬圓に低下したりしも大正十一年度には稍、景況を回復し總額二千六百萬圓に達せり。

年度	總額	阿片	食鹽	樟腦	煙草	酒
大正元年度	17,000,000	10,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
同 二年度	18,000,000	11,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
同 三年度	19,000,000	12,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
同 四年度	20,000,000	13,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
同 五年度	21,000,000	14,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000

四一銀行

臺灣に於ける銀行は大正十一年十二月末現在行數八(内三十四銀行は支店)にして、其支店數四十三、資本金九千三百萬圓、準備金一千七百萬圓、純益金七百六十五萬圓、預金二億一千八百萬圓、貸出金六億三千八百萬圓なり。

銀行	支店	資本金	準備金	純益金	預金	貸出金
臺灣銀行	1	9,300,000	17,000,000	7,650,000	3,770,000	76,500,000
華南銀行	1	10,000,000	1,000,000	8,000,000	1,000,000	3,600,000
新高銀行	1	10,000,000	1,000,000	8,000,000	1,000,000	3,600,000
彰化銀行	6	6,000,000	1,000,000	4,000,000	4,000,000	3,300,000
臺灣商工銀行	9	5,000,000	1,100,000	3,900,000	3,500,000	2,300,000
嘉義銀行	2	5,000,000	1,100,000	3,900,000	3,500,000	2,300,000
臺灣貯蓄銀行	1	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	400,000
三十四支店	2	5,000,000	1,000,000	4,000,000	4,000,000	3,300,000

四二物 價

臺灣の物價は世界大戦の影響を受くること比較的少かりしも、戰局の進展に伴ひ、大正七年頃より著しき昂騰を示し、大正九年にはその絶頂に達したりしか、翌大正十年以降は稍、低落の趨勢に在り。即ち主要なる日常生活必需品の臺北市に於ける物價の最近十箇年の指數はよくその趨勢を示せり。

大正元年	二〇〇	米	甘藷	麥麵	米麵	醬油	牛(牛)	豚肉	木炭	薪
同二年	二〇〇	米	甘藷	麥麵	米麵	醬油	牛(牛)	豚肉	木炭	薪
同三年	二〇〇	米	甘藷	麥麵	米麵	醬油	牛(牛)	豚肉	木炭	薪
同四年	二〇〇	米	甘藷	麥麵	米麵	醬油	牛(牛)	豚肉	木炭	薪
同五年	二〇〇	米	甘藷	麥麵	米麵	醬油	牛(牛)	豚肉	木炭	薪
同六年	二〇〇	米	甘藷	麥麵	米麵	醬油	牛(牛)	豚肉	木炭	薪
同七年	二〇〇	米	甘藷	麥麵	米麵	醬油	牛(牛)	豚肉	木炭	薪
同八年	二〇〇	米	甘藷	麥麵	米麵	醬油	牛(牛)	豚肉	木炭	薪

[Faint, illegible text on page 161]

同 同 同
 十 十 九
 年 年 年

二 二 港
 六 二 二
 〇 一 三
 三 一 金
 〇 七 金
 三 三 三
 一 三 三
 〇 三 三
 〇 三 三

同 同 同
 十 十 九
 年 年 年

二 二 港
 六 二 二
 〇 一 三
 三 一 金
 〇 七 金
 三 三 三
 一 三 三
 〇 三 三
 〇 三 三

四三 教 育

臺灣の教育は、大正十一年二月發布の臺灣教育令に依り、從來の方針を一變し、初等教育を除くの外は、悉く内産人共學の制を採るに至れり。而して初等教育機關たる小學校及公學校は七百二十五校、児童二十二萬三千人、高等普通教育機關たる高等學校、中學校及高等女學校は十七校、生徒四千三百人、師範學校は二校、生徒千八百人、實業教育機關たる實業補習學校、農業學校、工業學校、商業學校は十三校、生徒千六百人、專門教育機關たる高等商業學校、醫學專門學校、高等農林學校、商業專門學校は四校、生徒八百人、私立各種學校十六校、生徒二千三百人、書房八十八、生徒三千七百人あり。

次に初等教育機關を内地其の他と比較するに人口千に對する小學校児童數は内地府縣の百五十人最も多く、關東州の百十一人九分最も少く、我臺灣は百二十六人一分を以て僅かに樺太の上に位す。又臺灣の公學校、朝鮮の官公立普通學校、樺太の土人教育所及關東州の官立公學堂及公立普通學堂児童の人口千に對する割合は樺太の百十四人最も多く、我臺灣は五十五人五分を以て之に亞き、朝鮮は僅

北海道	一五八	七五	三六五	三三三	四八	一四八
内地府縣	三〇一	二七八	八五三	三三六	四四	一五〇
公學校						
臺灣	五五	四〇〇	三〇四	一八五	四五	五五五
朝鮮	九四	四六五	三〇〇	一五〇	五九	一三八
樺太	六	三	七	一	一	一
關東州	一七	五	三三	一六	一	一〇

公學校の朝鮮は官公立普通學校、樺太は土人教育所、關東州は官立公學堂及公立普通學堂の事實なり。
人口に付兒童算出の基數は小學校に在りては内地人のみを公學校に在りては各其の本土人のみを以て算出す。
臺灣の兒童は大正十二年三月一日現在なり。
朝鮮は大正十一年度末(兒童は三月一日)現在にして大正十一年朝鮮總督府統計年報に依る。
樺太は大正十一年度末現在にして第十五回樺太廳治年報に依る。

關東州は州内のみの事實を掲げ大正十一年末現在にして、關東州第十七統計書に依る。
北海道及内地府縣は大正十年三月末(兒童は三月一日)現在にして第四十二回日本帝國統計年報に依る。

衛生機関

四四 衛生機関

臺灣には大正十一年末現在、官立十二、公立十八、私立八十八、計百十八の醫院と、八百二十一名の醫師と、六百三十二名の衛生士、四百二十一名の産婆及助産婦を有す。醫師衛生一人に對する人口は全島平均二千六百三十人にして、その割合の最も少きは新竹州の二千七十七人、最も多きは臺東廳の三千五百八十六人なり。

總數	醫院		醫師及衛生士		産婆及助産婦	
	官立	公立	總數	衛生士	總數	一人に對する人口
臺北州	三	六	一四	一〇	一〇	二、三〇〇
新竹州	一	七	三〇	一〇	一〇	二、七〇七
臺中州	一	三	一〇	一〇	一〇	二、三〇〇
臺南州	一	六	一七	一〇	一〇	二、三〇〇
高雄州	一	三	一〇	一〇	一〇	二、三〇〇
臺東廳	一	一	一〇	一〇	一〇	三、五八六
總數	十二	十八	一四七	一〇〇	一〇〇	

四五 水道

臺灣に於ける既設水道の總數は二十三箇所にして、其の所管は臺灣總督府所管
 一(恒春種苗支所)、陸軍省所管三(臺東、玉里、パロン)、州所管三(臺南、彰化、含
 む)高雄、屏東にして其の他は總て所在市街庄の經營に係る。
 大正十一年度末現在給水戸數は計量器の設備なき分七箇所を除き約三萬一千戸
 にして同年度中の消費水量は同しく千九百七十四萬立方米なり。

名 稱	給 水 開 始 年 月	年度末現在		計量器供給	放任供給
		給水戸數	消費水量(立方米)		
臺北	明治三十二年五月	110	1,100,000	1,100,000	0
基隆	同 三十五年三月	100	1,000,000	1,000,000	0
彰化	同 四一年三月	100	1,000,000	1,000,000	0
臺南	同 四二年四月	100	1,000,000	1,000,000	0
南投	同 四四年六月	100	1,000,000	1,000,000	0
雲林	同 四四年九月	100	1,000,000	1,000,000	0
士	同 四四年九月	100	1,000,000	1,000,000	0

大	甲	同	四五	六	月	一	五	三	〇	〇	〇
斗	六	同	四五	六	月	一	五	三	〇	〇	〇
高	雄	大正	三	年	四	月	一	八	〇	〇	〇
嘉	義	同	三	年	二	月	一	八	〇	〇	〇
三	星	同	三	年	三	月	一	八	〇	〇	〇
臺	中	同	五	年	五	月	一	八	〇	〇	〇
屏	東	同	五	年	一	月	一	八	〇	〇	〇
花	港	同	一	年	四	月	一	八	〇	〇	〇
新	南	同	一	年	四	月	一	八	〇	〇	〇
新	化	同	一	年	四	月	一	八	〇	〇	〇

本表の外金山、坪林、豊原、臺東、(和)恒春(福源支所)、玉里の七水道
あるも、計量器の設備なく為に消費水量不明に付之れ除く。

調査表

四七 阿片吸食特許者

臺灣總督府は阿片問題に就ては嚴禁主義を避けて漸禁の方針を執り、阿片癮者と認むる者に限り之が吸食を許可し、漸次之が絶滅を期し、逐年豫期の目的の到達に近づきつゝあり。即ち之を最近十一年間に就て觀るも、阿片吸食特許者(本島人)の数は八萬七千三百七十一人より四萬二千八百八人に半減したり。

年	總數		指數	
	男	女	男	女
大正元年	八七,三〇一	二五,七二五	一〇〇	一〇〇
同 二年	八三,三〇六	二五,七二五	九五	一〇〇
同 三年	八〇,九七九	二五,七二五	九二	一〇〇
同 四年	七九,七三三	二五,七二五	九一	一〇〇
同 五年	七八,四八七	二五,七二五	九〇	一〇〇
同 六年	七七,二四一	二五,七二五	八九	一〇〇
同 七年	七六,〇〇〇	二五,七二五	八八	一〇〇

特許者以上の本島人に在り

四八 鐵道

臺灣の鐵道は、大正十一年度末には官設鐵道(阿里山鐵道を含む)の營業哩數五百十三哩に達し、外に私設鐵道千二百四十哩を有す。私設鐵道は主として製糖會社の經營する所にして、内營業線は二百九十八哩なり。

今之を内地其他と比較するに百方里に付鐵道營業線の哩數は關東州の二百九十一哩九分最も多く、我臺灣の六十九哩九分之二に亞き、樺太の四哩一分最も少く、更に人口萬に付哩數は樺太の十哩四分二厘最も多く、朝鮮は一哩未滿にして最も少く、臺灣は二哩を以て内地と伯仲の間に在り。

營業線延長(哩)

	總數		百方里に付哩		人口萬に付哩	
	官設	私設				
臺灣	八〇	五三	三六	四一	三	三
朝鮮	二〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
樺太	三	一	一	一	一	一
關東州	九	一	九	一	九	一

四九 郵便、電信、電話

臺灣に於ける郵便、電信、電話の現況を觀るに、大正十一年度に於て通常郵便は引受五千九百萬、配達六千六百萬、電信は發信百二十三萬、着信百二十七萬、爲替は振出二千四百四十萬圓、拂渡千五百九十萬圓、貯金は預入二千萬圓、拂戻九百六十萬圓なり。又同年度末現在電話加入者數は一萬三千二百二十、年度中加入者發信通話數は四千二百五十萬、公設電話發信通話數二十一萬あり。今之を内地其の他と比較するに、人口十に對する割合は通常郵便引受數、電報發信、爲替振出及貯金預入を通して最多數を示すは樺太にして、其の最小數は通常郵便引受、電報發信及爲替振出の三は朝鮮、貯金預入は臺灣なり。又人口十に對する電話加入者數の最も多きは樺太、最も少きは朝鮮にして、同加入者一に對する通話數の最も多きは北海道、最も少きは朝鮮なり。

一 郵便、電信、爲替、貯金及電話

通常郵便	引受	五、七六八、〇〇〇
配	六、六四四、〇〇〇	
人口十に對する	二、五〇九	
受		

五〇 警察官署及職員

臺灣の地方警察機關數は大正十一年末現在に依れば州警務部五、廳警務課二、警察署四、警察分署二、郡警察課四十七、支廳六、派出所及駐在所千三百九十にして、同職員の數は警視二十一人、警部及警部補五百五十八人、巡查七千三百三十三人なり。

今之を内地其の他と比較するに、一方里に對する巡查の數は、關東州の三人九分最も多く、臺灣は三人一分を以て之に亞き、巡查一人に付人口は北海道の千七百四十三人第一位を占め、内地府縣の千二百二十八人之に亞き、臺灣は五百四十七人を以て僅かに樺太の上在り。

警察分署	派出所	駐在所	警視	警部及警部補	巡查	一方里に付る巡查人口
臺南	二	一	一	一	一	一
高雄	一	一	一	一	一	一
基隆	一	一	一	一	一	一
新竹	一	一	一	一	一	一
嘉義	一	一	一	一	一	一
台南	一	一	一	一	一	一
屏東	一	一	一	一	一	一
花蓮	一	一	一	一	一	一
台東	一	一	一	一	一	一
澎湖	一	一	一	一	一	一
金門	一	一	一	一	一	一
馬祖	一	一	一	一	一	一
基隆	一	一	一	一	一	一
新竹	一	一	一	一	一	一
嘉義	一	一	一	一	一	一
台南	一	一	一	一	一	一
高雄	一	一	一	一	一	一
屏東	一	一	一	一	一	一
花蓮	一	一	一	一	一	一
台東	一	一	一	一	一	一
澎湖	一	一	一	一	一	一
金門	一	一	一	一	一	一
馬祖	一	一	一	一	一	一

關東州は州内のみの事實にして、警務署は警察署、同支署は警察分署として掲出す。

朝鮮、樺太、關東州は各府統計表に依る。

北海道及内地府縣は大正十年四月一日現在にして第四十二回府縣統計年報に依る。

五〇 警察官制の概況

警察官制の概況は、大正十年四月一日現在にして第四十二回府縣統計年報に依る。

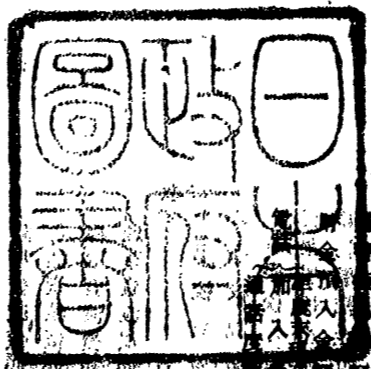
警察官制の概況は、大正十年四月一日現在にして第四十二回府縣統計年報に依る。

五一 最近十一年間の進歩

項目	大正元年	同十一年	大正元年を以ての増減
人口	3,375,000	3,500,000	125,000
内地	3,375,000	3,500,000	125,000
本島	3,375,000	3,500,000	125,000
生蕃	3,375,000	3,500,000	125,000
外蕃	3,375,000	3,500,000	125,000
耕地	1,200,000	1,300,000	100,000
畑	1,200,000	1,300,000	100,000
田	1,200,000	1,300,000	100,000
農産	1,200,000	1,300,000	100,000
畜産	1,200,000	1,300,000	100,000
林産	1,200,000	1,300,000	100,000

阿片賣渡價額	六〇三〇六元	一〇五
食鹽賣渡價額	五七五元	三〇
樟腦賣渡價額	五七五元	三〇
煙草賣渡價額	一〇七五元	三〇
小學校兒童	八六〇	一〇〇
公學校兒童	一〇〇元	一〇〇
中等學校生徒	一〇〇元	一〇〇
實業學校生徒	一〇〇元	一〇〇
師範學校生徒	一〇〇元	一〇〇
專門學校生徒	一〇〇元	一〇〇
官設鐵道運賃	三三三六元	一〇〇
運輸乘客貨金	三三三六元	一〇〇
收入貨物貨金	二五八〇元	一〇〇

礦工業產	一七〇元
糖業產	一七〇元
甘肅作付面積	一七〇元
製糖	一七〇元
外國貿易	一七〇元
內地貿易	一七〇元
財政	一七〇元
專賣	一七〇元
總賣出	一七〇元
總收入	一七〇元



私設鐵道
郵便、電信及電話
通常郵便引受通數
電報費借通數
數者通數

190	191	192	193	194	195	196	197	198	199	200
...



205

204

207

208

大正十三年十二月十七日印刷
大正十三年十二月二十日發行

臺灣總督府

台北市芝罘町三丁目一番地

印刷者 海老原四郎

台北市芝罘町三丁目一番地

印刷所 三協社